

# Pandora

# パンドラ

— 美しき災いと希望 —

Romance & mystery

file03. 殺人事件でお会いしましょう



# Pandora

Love Romance

終業のチャイムが聞こえてきて、サリーはほっと息をついた。

旅行会社の事務の仕事について、今日で二週間。

仕事にはようやく少し慣れたのだが、一日中、デスクに向かって座り、パソコンのモニターを見ているということに慣れない。

肩こりと眼精疲労はピークとなっている感じで、背中とこめかみがズキズキうずく。

「お疲れさま、サリー」

隣のデスクで事務をしているエミリーが、にっこりと微笑みかけてくれた。

癖のある赤毛に、緑の瞳。鼻の上に散るそばかすが、とてもキュート。

明るくて世話焼きな彼女は、サリーに手取り足取り仕事を教えてくれた。

「今日はどう？ そろそろいいんじゃない？」

顔をのぞき込まれ、片目を意味ありげに閉じられて、サリーは苦笑をもらす。

入社してからずっと、エミリーから、二人だけの歓迎会をしたいと言われていた。

だが、サリーはそのありがたいお誘いを、ずっと断ってきたのだ。

エミリーとは、二人しかいない事務員の仲間だし、仕事を教えてもらったという恩がある。

それに、エミリーはとても楽しい人で、一緒にいることが苦になることなどない。

「それじゃ、行きましょうか？」

「そうこなくっちゃ！」

職場を出て、そのまま地下鉄に乗って、繁華街に出た。

二人の職場である旅行会社は、地下鉄の地下通路にある小さな店だ。

便利がよいせいか、利用客は多く、二人の仕事も多い。

長いデスクワークで凝り固まった体を伸ばし、おしゃべりを楽しみながら、二人は女性向けのおしゃれな店に入った。

たくさん料理を頼んで、カラフルなカクテルで乾杯して。

仕事の愚痴、上司の悪口、たわいない世間話を楽しむ。

ごく普通の、会社帰りの光景。

(こういうの、憧れていたんだよね……)

警察時代、周囲は男性ばかりだった。

しかも、定時に帰れることなんて滅多になくて。

飲みに行くことがあったとしても、それは事件の終わった後、誰かの不幸を見て聞いて、どうしたって落ち込んでしまうのを持てあまして、刑事同士で慰めあうような、そんな飲み方がほとんどだった。

エミリーと話しているのは、今日、風変わりな格好をした客が来たとか、書類の不備を上司にネチネチ叱られたとか、ツアコンの誰それは格好いいとか、そんな平和なこと。

前の就職先である、イベント会社に勤めていたときも、何度かこういう機会があって、とても嬉しかった。

こういった『普通』なことに、ごく普通の『日常』に、憧れてしまう気持ちは止められない。

でも、これを心から楽しんでいるのかと聞かれれば、サリーは口ごもる。

楽しいことには間違いはないのだが、かなり気を遣っている。

言葉には気を付けるし、刑事であったことは話したくないから、過去の話は極力避ける。

違和感を与えたくないから、二十七歳の事務員が知っているわけがない事など、うっかり口にしないようにしている。

本当の自分を受け入れてもらっているわけではないのだという意識は、常に心の奥底に残っていて。

それで、心から楽しめるわけがない。

「ねえ、サリーは、髪をおろさないの？」

「え？」

聞かれて、サリーはドキリとした。

瞬間、思い出したのは、あの美貌の魔法使いのことで。

(髪、おろしているほうが似合うね)

「綺麗な髪なのに、もったいな～い。長いんでしょ？」

「背中の中ぐらいい。手入れしてないから、綺麗じゃないのよ」

エドウィンは、いつもサリーの髪を綺麗だとほめてくれた。

さりげなく、髪に触れたり。指に絡めたり。

あの魔法使いは、さりげなく触れてくるのがとても上手で、警戒心を持つ間もなく、腕の中に抱きしめられキスされたことだってある。

(やだ。思い出さないでよっ)

自分の無駄に優秀な記憶能力に、思わず腹が立ってしまうほど、エドウィンの記憶が鮮明に戻る。

ピカピカの金髪に、深い緑の瞳は、いつも笑みを浮かべていたような気がする。

魔法使いとしての営業用笑顔は、それはもう魅力的だったけれど、ステージを下りた素の彼の笑顔も、負けないくらいに魅力的で。

乱暴な話し方も、妙に子供っぽいところも、さりげなく乱暴者なところも、凄く素敵で。

どんなエドウィンにも共通していたのが、お日様みたいに明るくて暖かったこと。

(忘れる忘れる忘れる)

エドウィンの部屋から出た夜から、ずっと心の中でとなえている呪文。

でも、ほとんど効果がない。悔しいぐらいに。

半月前、ロッシュの部屋にまで押しかけてきたエドウィンを思い出し、サリーはきゅっと唇を引き結んだ。

諦めないと言い、実際、ロッシュの部屋にまで来てくれたエドウィン。

嬉しくなかったなんて、とても言えない。

「サリー？」

不意にエミリーに顔をのぞき込まれ、サリーはびくりと震えた。

そんなサリーを、エミリーは笑っている。

「サリーったら、何考えてたの？ なんだかすっごく嬉しそうだったけど」

「そ、そう？」

「わかった。彼氏のことでしょ～。やっぱり、いるんだ」

「やだ。いないってば」

「あやし～～」

「ちがいますっ」

思わず、強い口調で否定してしまったサリーに、エミリーは目を瞬いた。  
エミリーはちょっとからかっただけなのだから、もっと軽く冗談でかわせばよかったのだ。  
失敗だとわかって、サリーはうまい言い訳や誤魔化しが思いつけなくて、グラスを見るふりをして俯いた。

「そっか。片思い？」

ぎょっとして顔をあげてしまったサリーに、エミリーは微笑する。  
さっきまでの、からかうような笑みではなく、どこかちょっと真剣な。

「私もさあ、片思い中だから、気持ちわかるなあ。その人のこと考えてるだけで、幸せになれちゃうよね」

「……そうね」

厳密に言えば、片思いではない。  
エドウィンは、きっぱりしっかり、愛していると言ってくれているのだから。  
でも、彼の側にいけないと、恋人同士にはなれないというのは、片思いと一緒にかもしれない。

自分の中に、彼への何か特別な思いがあることは、サリーも自覚していた。  
だがそれが、恋なのか、愛なのか、もっと違うものなのか、それはよくわからない。  
ただ、彼の側にもっと居たかったと思う。  
そしてそうできていれば、自分の中のこの思いの正体も、はっきりしたのではないかと思えた

。

(でも、これでよかったのよ)

エドウィンの側にいるわけにはいかない。  
魔法使いに、血なまぐさい世界は似合わないし。  
彼の周囲には、彼をととても大切に人が大勢いるのだから、自分の存在など受け入れてもらえないだろう。

未来のない関係なら、最初から特別なものにする必要なんてない。  
彼と自分とでは、住む世界が違いすぎるのだ。なんとも陳腐な言いぐさだけど。

あとは、このままエドウィンが忘れてくれるか、諦めてくれればいい。  
だが、それがどうやら無理そうだと思うのは、サリーの希望的観測というわけではないだろう

。

優秀な情報屋のロッシュは、いつか必ず居所は知れるぜと、断言してくれた。

ロッシュの名前だけで、たった三日で自宅まで突き止めたエドウィンなら、それも可能だろうとサリーも思う。

今回、アパートは偽名で借りたのだが、就職は本名でした。以前勤めていた会社が、推薦状を書いてくれたからだ。

就職難のこのご時世、きちんとした会社に就職するには、推薦状は欠かせない。

以前のように外に出るような仕事ではないから、そう簡単にエドウィンに知られるとは思えないが。

(時間の問題よね)

だが、それまでの猶予期間はある。

今度、エドウィンに会ったときまでに、きっぱりお断り出来るようになっていればいい。

嫌がる相手に強引に迫るほど、エドウィンは暇では無いはずだし、きつともてるんだろうし。

「告白とかしたりしないの？」

「え」

ぎくりと、サリーは体を震わせてしまった。

「じっと待っていても幸せはこないじゃない？ 幸せは自分でつかむものだって、母によく言われたわ」

「……」

(幸せ……)

サリーは、自分から自分の幸せのために、何かしたことがあるだろうかと考えた。

そして、少なくとも、ここ十数年、そんなことはなかったのではないかと思えた。

そんな贅沢なことは、許されなかった。  
幸福になることよりも、不幸にならないようにするだけで精一杯。  
周囲の人々に不幸を振りまかないようにするだけで精一杯だった。  
それさえも上手く出来たとは言えないのに、自分の幸せなど考えたこともなかった。

「ねえ、サリー？」

サリーは、自分が考えに没頭してしまっていたことに気が付いた。  
きっと凄く真剣な顔で、黙り込んでいたのだろう。  
ちょっとした恋の悩みで、ここまで考え込んでしまったのをどう思われているだろうか。  
変に思われて、問いつめられたりするような展開にだけにはなってほしくない。

サリーはそっと、エミリーの表情を伺った。  
すると、エミリーもぼうっとして、テーブルに頬杖を付き、明後日の方を向いていた。

「好きな人から告白してもらったら、嬉しくてすぐに返事をするものよね？」  
「ど、どうかな……。状況っていうのもあるわよね」  
「返事が出来ない状況って、そんなのあるの？」  
「え、えっと……」

エドウィンに愛を告げられたというのに、何の返事もしていないサリーは、口ごもってしまう。

「す、好きだけど、好きって言えない状況よ」  
「だから、どんな？」  
「それはえーっと、あーそのー」  
「サリー」  
「自分にはもったいないって思ったりとか」  
「もったいない？」  
「そうそう。そういうの、思ったりするでしょ？ この人なら、もっと綺麗で素敵な人の方が似合うのにとか、自分とじゃ釣り合わないとか、もっといい人を見つけて……」

幸せになってほしいとか。

「でも！ でもそんなこと！ 変よ。だって、私だって好きなのに」

急に、がばっとエミリーがこちらに振り向き、上半身を乗り出して大きな声を出したのに、サリーは驚いた。

「彼がOKしてくれれば、私、すごく幸せになれるのよ。それ以上の幸せなんて、ないのに！」

どうやら、エミリーは誰かに告白をして、その返事をもらえてないようだった。

サリーをけしかけているようで、自分の悩みを話していたらしい。

だから、サリーが拳動不審だったのに気が付かず、会話に一々サリーが動揺していたのにも気が付かず、会話が成立していたらしい。

(問いつめられなくてよかったけど)

なにやら疲労を感じて、サリーは肩を落とした。

「カスパーに告白したのね」

ぼぼっと、火が吹き出そうなほど激しく、エミリーは赤面した。

「ど、どうしてわかったの！」

(いや、わからないほうがどうかと思いますけど)

ついさっきまで、カスパーがどれほど格好いいか、エミリーは力説していたのだ。

サリーもまあ、彼のことはいい男だと思う。

金髪に緑の瞳で、さわやかな笑顔の好青年。

サリーも時々、これはエミリーには絶対に言えないが、彼の笑顔にドキッとすることがあった。……少しだけ、誰かに似ていたのだ。

「でも、彼、ずっとツアーで出かけているじゃない。その前に告白したの？」

「ええ、そうなの。それで、返事は帰ってくるまで待つてほしって言われて」

どうやら、エミリーは話したかったらしい。

サリーが聞かなくても、どんどん話し始めた。

どうやって、カスパーに告白したのか、その状況と苦労を長々。

そして、彼がツアーに出ている間、どれほど気をもんでいたのか。

「あ、もしかして、今日、帰ってきているんじゃないの？」

「そうなの！」

それなら、明日、カスパーは店に顔を出すだろう。

エミリーは待ちに待った返事を聞けるということだ。

「いよいよなの。すごい緊張してるのよ」

エミリーはとても嬉しそうだった。

彼女は人目をひく美人というわけではないが、十分に可愛いし明るい性格で、一緒にいてとても楽しい女性だ。

カスパーとなら、きっとお似合いだし、エミリーにはいつも幸せそうに笑っていてほしいから、サリーもとても嬉しかった。

「頑張っってね」

「ありがとう、サリー！」

二人は乾杯をして、にこにこ笑いあった。

そのまま二人きりの歓迎会は盛り上がって、深夜近くになって、ようやく店を出た。  
だが、明日への期待と緊張もあるのか、エミリーのテンションは全く下がらず、もう一軒行こう！ と主張して譲らない。

「でも、エミリー。もうかなり遅いわよ」

ここらへんは、遅くなるとあまり安全とはいえない所なのだ。  
歓楽街なので、それも当然なのだが。

「あと一軒だけ！ ね、サリー」

「エミリーったら。明日、ボロボロの顔で、カスパーに会いたくはないでしょ？」

「大丈夫！ あと一軒だけなら、いいでしょ」

どうやら、エミリーはかなりハイテンションのようだった。  
きっと、ずっとカスパーのことを誰にも話せず、話した友人もいるのかもしれないが、カスパーを知っているサリーと話を出来たことは、やはり嬉しかったのだろう。

(しょうがないなあ)

それに、サリーも楽しかった。  
こんな風に羽目を外すのだって、凄く久しぶりだし。

「私ね、とってもいいお店知っているから。そこに行こうよ」

と、サリーが返事をするのを待たずに、エミリーは走り出していた。  
裏通りにある店らしく、細い路地をどんどん入っていく。  
酔っぱらいのくせに、あんなに走って大丈夫かしらと、サリーは苦笑をもらす。

「あ、道、一本、間違えちゃった！」

酔っぱらいのお約束な行動に、サリーは足を止める。

「戻ってらっしゃいよ。やっぱりもう帰れって、神様が言ってるんじゃない？」  
「なに言ってるの。確か、ここの横道から抜けれると思うから」

エミリーは路地と路地をつなぐ更に細い横道に、一人で入っていった。

まだ店の開いている時間だといっても、女性の一人歩きはあまりおすすめできない場所だ。

サリーは慌てて、エミリーを追って走り出した。

「きゃっ！」

道の向こうから聞こえてきた、エミリーの短い悲鳴に、サリーはぎくりとした。

さっと緊張が走り、走る速度は酔っぱらった女性のそれから、刑事のそれに変化する。

ショルダーバックを抱え、その中にある銃をいつでも出せるように、手を入れる。全て、無意識の行動だった。

「エミリー！」

路地に入ると、道の真ん中に座り込んでいるエミリーの姿が見えた。

「大丈夫？」

サリーが呼びかけても、エミリーはサリーを振り返らない。

エミリーは路地の曲がり角に座り込んでいて、曲がり角の向こうを、呆然とした顔でまっすぐに見つめていた。

(あの向こうに何かある)

サリーはエミリーの前に彼女をかばうように、曲がり角の向こうに銃を構えながら、仁王立ちになった。

「！」

曲がり角の向こう、細い路地には、女性が一人、倒れ伏してた。

長い黒髪がひどく乱れ、彼女の顔を隠している。

そして、女性の体を中心に、ゆっくりと赤い色の水たまりが広がり始めていた。

サリーは躊躇無く、その女性に駆け寄った。

髪をかきあげ、顔を確認する。目は恐怖にだろうか、見開かれていたが、サリーを見ようとはしなかった。

そっと、指一本で、心臓の鼓動をさぐる。どこに触れても、手首にも、首筋にも、脈は感じられなかった。

(多分、即死に近いわね)

女性の心臓のすぐ下に、大きな刺し傷があった。

周囲に凶器は見当たらないが、多分、大型のナイフだろう。

サリーはこれ以上現場を荒らさないように、そっと後ずさった。

銃をバックにしまい、エミリーの前に膝をつく。

「エミリー、大丈夫？」

サリーの体が現場を隠すからか、エミリーの目に少し光が戻った。

「エミリー。サリーよ。聞こえる？」

「………サリー？」

「ええ、そうよ。エミリー、私がわかる？」

「ええ、わかるわ」

ぼろりと、エミリーの目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

すぐに抱きしめて慰めて、こんな現場など忘れさせてあげたかったが、サリーはどうしても聞いておかなければならないことを先に済ませたかった。

「犯人を見た？」

「………え？」

「とても大切なことよ。あなたがここに来たとき、他に誰かいなかった？」

死体はまだ暖かく、出血だって止まっていない。

きっと、今、殺されたばかりなのだ。

「あの女性を殺した犯人よ。捕まえなくちゃ。わかる？」

「え、ええ」

「誰か見た？」

「は、走り去る、後ろ姿だけ」

サリーは振り返る。

路地の先は闇に閉ざされていた。

そして、ここらへんは迷路のように細い路地が広がっていることを、サリーはよく知っていた

。

今、一人で追うのは無理だ。

それに、エミリーを残していくわけにもいかない。

サリーはバックから携帯を出すと、警察に電話を始めた。

「警察ですか？ 女性が死んでいます。殺されたばかりのようです。すぐに来てください」

通報を終えると、しっかりとエミリーの体を抱きしめる。

彼女は小さく震えていた。

それがとても、サリーには切なかった。

翌日。

サリーはいつも通りに出勤したが、流石にエミリーは欠勤だった。

昨夜、駆けつけた警察に同行を求められ、警察署で明け方近くまで話をさせられた。

エミリーは第一発見者として、かなりしつこく話を聞かれていた。

第一発見者を疑うのは捜査のセオリーなのだし、逃走した犯人の後ろ姿を見たのだから、仕方がないのだろう。

だが、生まれて初めて警察署の受付よりも奥に入ったエミリーにとって、それはとんでもないストレスだったに違いない。

それを言うなら、他殺死体などを目の前で見るとも、初めてだっただろう。

(早く元気になってくれるといいんだけど)

本当なら、仕事を休んでエミリーの側についてあげたいのだが、二人しかいない事務が二人とも休むわけにはいかない。

それに、やけに冷静に対処していたサリーに、エミリーは奇異の目を向けていた。

あんな事態に冷静であるばかりではなく、きっと慣れているようにも見えたのだから、仕方がない。

だが、あんな風に見られるのは、やはり辛くて。

それにしても。

サリーは、そっとため息をついて、肩をおとす。

刑事を辞めて、前のイベント会社では十ヶ月無事件で働けたのに。

今回はわずか二週間で、事件に遭遇してしまった。しかも、殺人事件。

(ロッシュが知ったら、それみたことかって言われるんだろうな)

耳の早いロッシュは、きっともう知っているんだろうが。

(でも、今回、被害者とは無関係だったし)

亡くなった女性には申し訳ないのだが、エミリーになにもなくて、サリーは心の底からほっとしている。

「えっと、サリーだっけ？」

サリーのデスクに腕をつき、若い男が声をかけてきた。  
知っている顔。エミリーが告白した相手、カスパーだった。

「エミリーは？ もしかして、欠勤？」

そういえば。あの騒ぎですっかり忘れていたが、今日はエミリーにとって、とても大切な日だったのだ。

「そうなの。ちょっと事情があって」

「そうか……」

残念だなと、カスパーが口の中でつぶやくのを、サリーは聞いた。  
これはもしかして、もしかするのではないだろうか。  
そうならば、ここはエミリーのためにも、フォローしなければと、サリーは思った。

「彼女、昨日、ひどいめにあったのよ」

上司が銀行に行っているのを幸いと、サリーはカスパーに昨夜の出来事を細かく説明した。  
カスパーはとんでもない事情に、当然ながら、とても驚いていた。

「そ、それで、彼女は大丈夫なのかい？」

まず、エミリーのことを心配するなんて、これはかなりいい傾向なのでは。

「今はとてもショックを受けていて。怯えているみたいなの」

「そうか……。それで、彼女には危険はないのかい？」

「危険？」

「だって、犯人を見たんだろう？ それは、犯人もエミリーを見たってことになるじゃないか。  
犯人がエミリーの口を塞ごうとか」

「ああ、その危険ね」

勿論、カスパーに言われるまでもなく、サリーはその危険について考えた。

「大丈夫よ。エミリーは走り去る犯人の後ろ姿を見ただけなの。しかも、かなり距離があって、服の色さえ証言出来ないほどよ。エミリーを振り返ることもなかったから」

犯人がエミリーを見なかったイコール、エミリーも犯人の顔を見なかったということで、刑事達は残念に思っただろうが、サリーにとっては一安心だった。

もし見ていたとしたら、エミリーは事件にもっと深く関わることになるし、それこそ犯人に命を狙われる危険だってでてくるのだから。

「そうか。よかった」

カスパーもほっとしている。

エミリーを本気で心配している様子の彼を見ていて、サリーはこれはもしや二人にとっていきっかけになるのではと思えた。

今、エミリーは誰かの手をととても必要としているわけだし、その手をカスパーが差し出してくれるのなら、きっと二人の絆は深まるのではないだろうか。

「側にいてあげたいんだけど、私まで仕事を休むわけにはいかないの」

「俺が行くよ」

「助かるわ」

即答してくれたカスパーに、サリーはにっこりと微笑んだ。

どうやら、今回の事件は、それほど周囲を不幸にすることなく終わりそうで。

サリーはとても嬉しかった。

翌日。

エミリーは今日もまた欠勤で、事情を知っている上司は、仕方ないと思っている様子だった。ただ、その分、サリーの仕事は当然ながらかなり増えることになって。

今日の分を全て終えて、席を立ったのは、終業の五時を大きくまわり、夜八時近くになっていた。

(疲れた……)

今日は昼食もまともに取れなかった。

ずっと椅子に座りっぱなしで、立ち上がると、膝がミシミシ音を立てて伸びていくような気さえした。

帰宅して、食事をして。出来ればおいしいものをたっぷり食べたい。

そして、ロッシュに連絡するつもりだった。

第二発見者で、犯人も見えていないサリーは、事件後に話を聞かされただけで、その後、警察からは何の連絡もない。

当然、事件の捜査がどうなっているかも、わからないし、聞く権利もない。

だが、サリーは事件がどうなっているのか気がかりだった。

犯人が捕まらなければ、殺された女性だって浮かばれない。

それに、逮捕までは、エミリーが百パーセント安全だとは言いきれない。

捜査に口出しは出来ないが、自分に出来ることがあれば、何でもするつもりでいた。

事件のことを考えながら動いていたサリーは、ひどく疲れていたこともあって、いつもより注意力散漫だった。

だから、職場を出て、歩き出し、不意に後ろから抱え込まれるまで、危険に気づかなかった。

「！」

腰と首に、後ろから腕が回される。

ぐいっと後ろに引かれる力には、咄嗟のことで抵抗出来ず、サリーは背後に立っていた誰かの胸の中に倒れ込むことになった。

かなり背の高い男だと認識しながら、サリーは首にまわった腕を両手でぐいっとつかみ上げる。

素早い動作で体を丸め、そのまま背後の男を背負い投げにしようとした。

だが、背後の男は投げ飛ばされず踏みとどまり、逆にしっかりとサリーを抱え込んできた。

絶妙のタイミングだったのにと、愕然とするサリーの首筋に、背後の男の息がかかる。

改めて両腕がしっかりとサリーの体に巻き付いて、ぎゅっと引き寄せる力にもがいて抵抗した。

「サリー」

耳元で囁かれた声に、サリーはもがくのをぴたりとやめてしまった。

「やっと見つけた」

ぎゅっと、サリーが自分にまきつく腕を握りしめると、その腕の力が少し抜けた。

呆然としたまま、サリーが振り返ると、エドウィンがにっこりと微笑みながら、サリーを見つめていた。

「……エド」

「ようやく会えたね。ずいぶん、捜したよ」

「……」

頬を両手で優しくはさまれて、唇に唇が軽く触れていった。

「会いたかった。本当に。とてつもなく。心の底から」

「……」

「会いたかった」

ふわりと、今度はしっかりと正面から抱きしめられた。

抵抗しなければと思うのだが、サリーは体が動かなかった。

反則だと思う。

こんな風に突然やって来て、突然抱きしめられて、会いたかったなんて言われてしまったら。この魔法使いにそんなことをされて、それでも拒否できる人がいたら、ぜひお目にかかりたい。

「ど、どうしてここが」

「逃げようと思ってるだろ。視線が泳いでるぞ」

楽しそうに言われて、サリーは思わず顔を上げて、エドウィンを睨んでしまった。

「ナリスに何言われた？」

「……」

「なーんて、聞かなくてもわかるけどね。俺を事件に巻き込みたくないとか、そういうことだろ？」

真剣に考え、悩んでいることを、とても軽く言われて、サリーはかっとなった。

だが、おかげでエドウィンを振り払う気力がわいた。

「うぬぼれないでよ！ 私はただ、あなたには答えられないし、あのままあそこにいるのは」

「しーっ！」

唇に指を押しあてられ、サリーは思わず口を閉ざしてしまった。

エドウィンはサリーの言葉を聞いていたのかいないのか、きょろきょろと周囲を見回している。

「なんか注目あびてるよ」

言われて、周囲を見回せば、地下通路を行き交う人々の多くが、こちらを見ている。

足を止める人はいないが、振り返っている人はいて。

サリーは自分の頬がかっとな熱くなるのを感じた。

「夕食まだだろ？ 少し、時間いいかな」

本当は嫌だと言いたかった。

だが、嫌だと言っても、きっとエドウィンは納得せず、またここで議論が始まってしまうだろう。

(だから、仕方なくよ)

サリーが頷くと、エドウィンはにっこりと微笑み、彼女の手を引いて歩き出す。

何処に行くのか、聞きたいことはたくさんあったけれども、真っ赤な顔をあげるのが恥ずかし

くて、サリーは黙ってついていくしかなかった。

車に乗せられ、サリーが連れてこられたのは、海辺の賑やかなレストランだった。

とても投げやりな気分になっていたサリーは、車の中でも、レストランで席についても、むっつりと黙ったままで、ほとんど口をきかなかった。

だが、エドウィンはそんなサリーを気にする様子はなく、行き先を自分で決め、料理のオーダーも一人で済ませ、気詰まりにならない程度に話しかけてくれた。

目の前にドン！と、大皿に山盛りされたパスタが置かれ、そこからガーリックとトマトの食欲を刺激するいい匂いがしてきた。

エドウィンがさっさと取り皿にパスタをとりわけ、元気よく食べ始める。

お腹がぺこぺこなサリーも、フォークを取ると、よおっしと食べ始めた。

山盛りのパスタ、アツアツのガーリックトースト、トロトロのチーズがたっぷりのピザ、皮がカリカリに焼けたハーブチキン。

ほとんど無言で、せっせと食事をして、気が付けば、料理はほとんどなくなっていた。

「よく食べた！ 満足満足」

本当にたくさん食べたエドウィンは、椅子の背もたれに寄りかかり、ぽんぽんとお腹をたたいている。

ちなみに、ジーンズのウエスト部分は、あれだけ大量の料理を納めても、少しも変化していない。大した腹筋である。

「満足？」

聞かれて、サリーはほんの少しの戸惑いの後、頷く。

お腹がいっぱいになって、落ち着きを取り戻して。

サリーは今更ながら、エドウィンにひどい態度をとってしまったと、後悔していた。

多分、突然エドウィンに会ったことで焦っていたのと、今日はほとんど食事をしていなかったこと、疲れていたせいだと思う。

だだ、それを話してエドウィンに謝ってしまったら、なんだか二人の間が親密になってしまいそうな気がして。

エドウィンとはこのまま距離をおいておきたいから……。

「それじゃ、ちょっと歩こうか」

ここはちょっと話をするには騒々しすぎるしねと、エドウィンは立ち上がった。

にっこり微笑む彼は、いつもどおり魅力的で優しくて。

さっきのひどい態度も気にしていない様子に、サリーは安堵してしまっていた。本当なら、彼を怒らせてでも、遠ざけるべきだとわかっているのに。

「サリー？」

矛盾している自分が嫌になる。

エドウィンとは距離をおくべきだ。頭ではよくわかっている。

だけどきっと心は、彼を求めているのだろう。

頭と心。

どちらの指示に従うのか。

とりあえず今は、大きな事件に関わっているわけではないと、頭は冷静に分析する。

最近、巻き込まれた事件は、どうやら今までになく、周りの人々をとんでもない不幸に陥れる結果にはならなかった。

もしかしたら、少し運が上向いてきたかもと、心は甘いことを囁く。

でも今は、それをきっぱり否定する材料もなく。

そしてなにより、目の前で微笑むエドウィンに、頭は冷静に判断をくだせるわけもなく。

サリーは、少しだけよと自分に言い聞かせながらも、差し出されたエドウィンの手に手を重ねていた。

サリーがローファーをはいているのを確認して、エドウィンはサリーの手を引いて、砂浜へと歩き出した。

「寒くない？」

それは質問だったのに、エドウィンはサリーが答える前にさっさと自分の皮ジャケットを脱いで、サリーの肩に着せ掛けた。

海から来る風は冷たく、ジャケットを着せてもらえたのは嬉しかったが、ジャケットを脱いだエドウィンは、長袖のシャツ一枚にジーンズだけという薄着で、エドウィンの方がずっと寒そうになってしまった。

「俺は平気。君に会えて興奮しているから、熱いぐらいだ」

レストランの明かりがエドウィンの背中から彼を縁取るように照らし、サリーには彼の笑顔が輝いて見えた。

「仕事しているときは、いつもそうしているの？」

「？」

「その髪型とメガネ」

「ああ、これね。いつもこうしているの。外に出るときは、いつもよ。仕事するときだけじゃなくて」

「どうして？」

「目立たないように。標的になりやすいから」

じっとサリーを見ていたエドウィンは、不意に彼女に向かって手を伸ばした。

驚いて動けないサリーの髪止めに触れ、それを外してしまう。

さらりと肩に零れ落ちてくる髪を、エドウィンが指でそっとすいた。

「エド」

「俺と一緒にいる時は、こんな努力は必要ないと思うな。もしくは、無駄」

にやにやと、エドウィンはサリーのメガネも外してしまう。

「どういう意味」

「なぜなら、俺の方が君の何倍も目立つから。俺と一緒にいる君が、どんな格好をしていたって、ある意味、目立つのは避けられないから」

それは全くもって的確な指摘で。

レストランで食事中も、サリーは周囲の人々がちらちらとエドウィンを盗み見、若い女性同士の客はエドウィンを話題に楽しんでさえいた。

そういった視線は、エドウィンが有名なマジシャンであることを知っていて向けられるものも多かったが、それ以上に、とんでもなく見栄えのいい男性に対して、女性が向けてくるそれの方がはるかに多くて。

当然、一緒に居るサリーに対しても、好奇の視線は向けられた。

エドウィンの連れである以上、それはどうやら避けられないらしい。

「ブリザック警視に会ったよ」

サリーの手を引き、海辺を歩き出しながら、エドウィンがそう切り出してきた。

「知っているわ。あなたと会ったって、連絡くれたから」

「親代わりなんだって？」

「ええ、そうよ。両親を亡くして一人になってから、ずっと保護者になってくれているの」

「親戚とか？」

「違うわ」

エドウィンはもっと詳しく聞きたい様子だったが、サリーには話すつもりがなかった。

「ロブの話聞いたんですってね」

「気を悪くした？ 君のいないところで、君の過去を穿り返すような真似をして」

「いいえ」

「君に会いたくても、全く手がかりがなくて。君に関することなら、なんでも知りたかった。手当たりしだい、探したんだよ。ロッシュのところで君を見つけて、どれほどほっとしたか。もっとも、あの後、とても後悔したんだけどね」

「後悔？」

エドウィンはなんともいえない顔で、サリーを振り返った。

「あの時、どうしてドアを開けて君の顔を見なかったのか。どうして、君の手を引っ張って、連れてこなかったのかって」

「……………」

「でも、あそこで君を連れ出しても、君はまた必ず俺の前から姿を消す。それじゃあ、意味がないと思ったから、諦めたんだ。それでも、君をまた見つけるまで、気が狂いそうだったよ」

「そういえば、どうしてわかったの？」

「警察の情報をチェックしていたから」

と、エドウィンは片目を閉じてみせる。

「事件体質の君は、きっとまた何かの事件に関わってくるだろう？」

「……それって、警察のネットワークをハッキングしたってこと？」

「どうかな」

わざと視線をそらし、エドウィンはにやにや笑っている。

「ロッシュを見つけたことといい、あなたは色々な魔法を使うのね」

「うーん、まあ、そういうことにしておこうかな。それで、出てきてくれたということは、俺はまた君を口説いてもいいってことかな」

「どうしてそうなるの。それに、それをまだ言うの？ 私が本当に事件体質だってことは、あなたにもわかったでしょう？」

「うん、わかった。でも、俺は君が好きだ」

「エド」

「愛しているんだから、仕方がないじゃないか」

まるで、サリーが愛されるような魅力的な女性だからいけないんだ、というようなエドウィンの口調に、サリーは憤然と立ち止まった。

「仕方なくなんてないでしょ！ あなた、この前の発砲事件がどれほどツアーに影響を与えたか、もう忘れたの？ それでとても苦労していたじゃない。私と一緒にいれば、また同じようなことが繰り返されるわよ。絶対よ。それでもいいの？」

「いいよ」

「エド！」

立ち止まったサリーの正面に立ち、エドウィンは少しかがんで、サリーの視線に視線を合わせた。

「一つ聞きたい。正直に答えて欲しいんだけど」

「なに」

「君が俺から離れようとするのは、それが理由？」

「……………」

サリーは視線をそらそうとしたが、顎をとられて、強引にエドウィンの方を向かされた。

「しばらく同居を続けると、君は言ったね。でも、そんな約束、あっさり破って、君は姿を消してしまった。俺に見つからないように、他の男の家に隠れて。それを俺がどう思ったか、君にはわかる？」

怖くなって、サリーは無意識に逃げようとしていた。

だが、しっかりとエドウィンに腰を抱かれ、身動きさえとれなくなった。

「俺のことが嫌い？ 顔も見たくないほど、約束破るのなんて平気なほど、他の男の所に逃げ込むほど、俺が嫌い？」

「エド！」

「それとも、俺に迷惑かけたくないから、姿を消した？」

サリーは答えられなかった。

今ここで、嫌いだからと答えれば、サリーの望むとおり、エドウィンと距離をおけるだろう。そうすべきだと、頭ではわかっている。

だがやはり、そんなことは言えない。心が痛くて、苦しくて。

「……迷惑かけたくない」

つぶやくと、優しく、ぎゅっと抱きしめられた。

「で、でも、エド。私は」

言葉をさえぎるように、エドウィンに唇をふさがれた。

それは、口をふさぐのが目的の、触れるだけのキスではなく。

唇は深く重なり合い、あっという間に侵入してきた舌に求められて、舌を絡ませあった。

エドウィンに官能をかきたてられ、サリーは腕をしっかりとエドウィンの首に回し、彼にすがりつくように体を寄せていた。

「拒否しないね」

まだ唇の触れる距離で、エドウィンがそう囁いた。

「キスを許せるぐらいには、俺のことが好き？」

キスの余韻にひたって、とても幸せで甘くてふわふわな気分のサリーは、まだキスをやめたくなくて、エドウィンの髪の中に指を差し入れて、彼の頭を引き寄せようとした。

「それとも、キスぐらいは、誰とでもする？」

そんなわけがない。

少なくとも、こんな深いキスは、誰にだって許せるものじゃない。

黙ったまま、睨んでくるサリーに、エドウィンは小さく笑った。

「ちゃんと答えてくれないと、サリー。……俺はうぬぼれるよ？」

どきっとした。

やっぱり、さっきのひどい言葉を、うぬぼれるなとエドウィンに投げつけた言葉を、気にしていたのだ。

なんでもない風に振舞っていたけど、聞こえていなかったのではないかとさえ思ったけれど、エドウィンを傷つけてしまった。

でも、なんて言えばいいのか。

好きだと言えばいいのか、そんなことは出来るはずもない。

謝ればいいのか、それだってどう誤解されるかわからないし。

迷って、困って、サリーは、思い切って背伸びをした。

そして、エドウィンの唇に自分から唇を押し当てた。

すぐに、エドウィンはキスを返してくれて。

キスの主導権は、あっという間にエドウィンに移って。

キスを深めてくるエドウィンに、サリーは彼の首に両腕をまわしてすがりついた。

「愛しているよ、サリー」

しっかりと胸の中に抱き込まれ、耳元で優しく囁かれ、サリーはぎゅっと目を閉ざす。

その言葉を、どれほど自分が聞きたがっていたかということ。

そして、その言葉をそのまま、エドウィンにも囁き返したい自分を、自覚せずにはいられなかった。

翌日。

エドウィンの郊外の自宅。

エドウィンはナリスからの電話で起こされ、今もベッドの中で電話をしていた。

「だーかーら。しばらく休み。そう言っただろう？」

答えながら、壁の時計を見る。

現在、九時。

もう起きる時間だったとはいえ、こんな風に電話で起こされると、損をしたような気分になるのはどうしてだろう。

「休むのは、イリュージョンだけろう？ クローズアップの仕事はいつもやっているじゃないか。テレビの依頼もきているし」

「断ってくれ」

「エドウィン」

「悪い、ナリス。でも、駄目だ。しばらく休む」

電話の向こうで、ナリスがため息をつくのがわかった。

申し訳ないと思いつつも、エドウィンは主張を変えなかった。

ナリスが諦めるまで、拒否し続けた。

「電話は終わりましたか？」

コーヒーのいい香りと一緒に、バートが姿を見せる。

ベッドの上に座り込み、ぼーっと考え事をしていたエドウィンの前に、ベッド用のテーブルをだし、コーヒーを置いた。

「ああ。ナリス、すっげー怒ってた」

「彼もきっとわかっているんでしょう」

「……多分な」

エドウィンがサリーを諦めていないこと。

今も追いかけていること。

「彼女とは無事に会えたようですね」

エドウィンがコーヒーを飲み始めるのを待って、バートは話し出した。

「ああ、なんとか」

「逃げられませんでしたか」

「今のところは」

一昨日の夜、サリーの遭遇した事件のことを知った。

それから徹夜でサリーのことを調べて、午後五時の終業に間に合うように、午後四時からずっとサリーが出てくるのを待っていた。

ようやく会えて、話しも出来て、今日も会う約束も取り付けることが出来た。

何もなければ、今日も会えるだろう。

ただ、サリーの場合、何かある可能性が人より高いのだ。

しかも、約束を破られた実績もある。

目の前に居るのに、触れることも出来るのに、安心など出来ない。

ふわふわ浮いている風船のよう。

油断すれば飛んでいってしまう、だからといって強く抱きしめれば、割れてなくなってしまうようで。

「……生殺しな気分」

「なんですかそれは」

バートは笑っている。

最近、本当によく笑っている。いいことだが。

「キスはいいけど、それ以上は駄目。でもさ、なんていうか、強引に迫れば、それ以上だって大丈夫な雰囲気です」

「据え膳みたいな？」

「それともちょっと違うんだなあ。下手に手を出して、それがきっかけで逃げられそうな気もするから、何も出来ない。でも、したい」

コーヒーを飲み終わると、エドウィンは大きく伸びをして、ベッドから下りた。

額におちてくる髪をかきあげながら、バスルームへと歩いていく。

「焦らず、ゆっくりと」

まるで標語のようにバートが言うと、エドウィンは口の端をあげた。

「わかってるよ。お前の時だってそうだったし？」

エドウィンは、笑い声を残して、バスルームに消えていった。

残された、元凄腕の、エドウィン曰くひねた性格だった元情報部員は、軽く肩をすくめ、コーヒーカップを片づけ始めた。

口元に、微笑を浮かべながら。

ダイニングテーブルに用意してあった朝食をトレーに戻し、エドウィンはそのトレーを持って、地下のコンピューター室に向かった。

中では、バートがモニターをチェックしていたが、エドウィンが食事を抱えてやってきたことに、顔をしかめた。

「食事はきちんと取るべきですよ。仕事の片手間にとるようなことは、出来るだけしないでください」

「時間の節約だよ」

「何度も言いますが、休息と仕事と、きちんと区別しないとイケません」

「以後、努力します！ で、その後、どう？」

びしっと敬礼してみせたかと思うと、何もなかったようにバートの肩越しからモニターを覗き込むエドウィンに、バートは諦めのため息をついた。

この魔法使いは、集中しだすと、それ以外のことはすっぱり忘れるタイプなのだ。

最近では、勿論、サリーを中心にこの魔法使いの生活は成り立っている。

健康管理する立場の者としては、ちょっと待てと言いたい気分だ。

勿論、言ってくる人ではないことも、よく知っているのだが。

「警察の捜査は、思っていた以上に進んでいます。どうやら、素人の犯行のようですね」

「手がかりが残っていたとか？」

「被害者の女性のものと思われるバッグが、近くのゴミ置き場から発見されています。血痕付です」

「殺してから奪い取って、逃げる途中に捨てたってことか」

「そうですね。指紋もでてますね」

エドウィンはサンドウィッチを食べる手を止め、呆れた顔で首を左右に振った。

「馬鹿？」

「一応、ふき取っていますよ。ですので、指紋といっても、完全な形ではありません。照合するには足りません」

「それほど慌てていたんじゃ、バッグの中身はそのまま？」

「そのとおりです。財布からパスポートまで、全部残っていました」

「パスポート？」

「被害者は、外国人ですね。殺された日の夕方、飛行機で入国しています。航空券の半券が確認

されています。現在、捜査員が、被害者の身元調査に現地へ向かっているようです」

「ふーん」

通り魔でもなく、強盗目的でもないなら、怨恨だろうか。

それとも、慌てていたのも、何も出来ず、とりあえず逃走しただけか。

「これだけ杜撰な犯行なら、きっと目撃者がいるでしょう」

「逃走中を見られているだろうなあ。警察の聞き込みは？」

「難航しています。あそこらへんは、警察に非協力的な連中ばかりですからね」

犯行現場はまだ表通りに面しているが、そこを一本裏に入れば、一般人はほとんど立ち入らないような場所になる。

いわゆる裏社会に属している人々が生息しているところだ。

当然、警察に協力的な人種よりも、犯罪者の方が多いだろう。

「ライに連絡してみますか？」

バートに聞かれて、エドウィンは嫌そうに顔をしかめた。

「やだ。あいつに借りを作ると、後が怖い」

ライは、エドウィンの熱烈なファンの一人で、いわゆる裏社会のボスの一人だったりする。

ファンでいてくれるのは嬉しいのだが、その愛情表現が非常に個性的で、かなり苦労させられていた。

とんでもなく高価なプレゼントが届くのは、まあ理解の範疇として、ツアー中の護衛をすると黒服のいかつい連中を大量に送ってきたり、会場から宿泊先のホテルまで何十台もの車で周りを固められたり、イベントとトラブルと聞けば、こわもての弁護士が駆けつけてきたりと、エピソードには事欠かない。

それでも、ここ数年は、エドウィンの苦情と脅しの数々によって学習し、ライもだいぶおとなしくなっているのだ。

ここで下手にお願い事などして、また勢いづかせることだけはしたくない。

「情報屋にあたってみておいてくれ。それから、被害者のプロフィールがわかったら、知らせてほしい」

もしかしたら、サリーに関係する人物かもしれない。

サリーは面識がないようだが、もしかしたらということもある。

何よりもサリーが恐れているのは、自分の周囲でおきた事件に、友人知人が巻き込まれることだから。

「第一発見者の女性はどうしますか？」

「そうだな……。何も見ていないから、警察からはもう帰されているんだよな」

今のところ、サリーの周囲で事件に関わったのは、第一発見者のエミリーだけ。

現場を目の辺りにしたのはショックだろうが、それだけですんだのなら、よかったと言えるだろう。

前回、被弾したサリー。

警察での最後の事件で、重症を負ったサリーやロバートのことを考えれば。

(だが、もしこれでエミリーに何かあれば、サリーはひどく傷つくだろうな)

「彼女の住所、わかるか？」

「はい。護衛をつけますか」

「そうしてくれ。気づかれないように。距離をおいてもいいから」

「ディーに頼みますが、構いませんか」

「ああ。よろしく言うておいてくれ」

ディーは、エドウィンの後援会のメンバーの一人で、警備会社のオーナー社長。

この屋敷の警備システムは勿論、ツアーの警備からエドウィンの周囲は全て、ディーの会社が受け持っている。

「あとは、犯人だな」

見つけて捕まえれば、サリーの心配もなくなるはず。

そして、サリー自身も、そう考えているだろう。

きっと彼女は、また危険なことをしてでも、犯人を捜そうとするだろう。この前の時と同じように。

「言うておきますが、あなたもあまり危険な真似はしないでくださいね」

「そりゃ、すすんで危険な目に会おうとは思っていないよ」

「あなたが怪我でもしたら、彼女はきっと自分を責めて、あなたの前からまた消えますよ。彼女はパンドラですからね」

そう。サリーが今最も恐れているのは、エドウィンが事件に巻き込まれることだろう。

もしまた、事件にまきこまれて、それこそ怪我でもするようなことがあれば、今度こそ、サリーはエドウィンの前から姿を消すはずだ。

それでいて、側にいても、巻き込まれることはない、影響を与えることはないのだという確証を持ちたいと願ってくれていると、思う。思いたい。

側を離れたのは、迷惑をかけたくないからだと言ってくれたし、うぬぼれてもいいと、キスしてくれた。

だから、後は自分次第だと、エドウィンは思う。

「彼女を守り、尚且つ自分も無傷って、かなり難易度高いな」

エドウィンがぼやくと、バートはおやつという感じに眉を上げた。

「大丈夫ですよ。あなたは魔法使いですから」

「タネも仕掛けもある魔法使いなんだけどなあ」

楽しそうに笑うバートを見つめながら、いつかサリーもこんな風に笑ってくれるのだろうか、エドウィンは思った。

必ず残業だから、午後六時以降に来てと言っておいたのに、エドウィンは五時に現れたようだった。

なぜわかったかという、店に入ってきた二人組みの女性客が、店の外で人待ち顔で立っている男性について、噂をしていたからだ。

これはわざとではないかと、サリーには思えた。

昨日だって、きっと五時前から待っていてくれただろうし、女性客だってたくさんいたのに、誰も噂にはしなかった。

待っていることを知られたくなかった昨日と違い、今日は、待っているからと意思表示されている……と思えるのは気のせいではないはず。

幸い、今日は昨日ほど仕事がたてこんでいないから、それほど残業をしなくてすみそうだ。

これでは、エドウィンのことが気になって、のんびり仕事などしてられない。

急いですませてしまおうと、仕事に集中しだすと、携帯のメール着信音がなった。ロッシュからだった。

『★の目撃情報あり。連絡よこせ』

★とは、先日の殺人事件の犯人のことだ。

やはりと思えた。

どう見ても、犯行は衝動的だったし、現場が現場だ。

あそこらへんでは、挙動不審な人物は必ず誰かにチェックされる。警戒心の強い人種が多く住んでいるから。

「やあ、サリー」

背後から声をかけられ、サリーはびくっとしてしまった。

慌てて、携帯をぱちんと閉ざして、ロッシュからのメールを隠す。

「お帰りなさい、カスパー」

ちょっと笑顔が不自然だったかなと思ったが、カスパーは気づいていない様子だった。

外回りから帰ったばかりの彼は、サリーの隣のデスクに、重そうなバッグを置いて、ふうと息をついた。

「お疲れ様。コーヒーでもいれる？」

「いいよ、ありがとう。出先で飲んできたんだ。今日はもう帰りたいしね」

「エミリーの様子はどう？ そろそろ仕事に來れそうかしら」

「それはちょっと……無理じゃないかな」

手を止めて、カスパーは表情を曇らせた。

なんだか考え込むような彼の様子に、サリーはエミリーの様子がとても心配になった。

「まだ怖がっている？」

「そうなんだ。夜中に飛び起きて、泣き出したりして」

ということは、カスパーは朝までエミリーと一緒にいたのだろうか。

だとしたら、エミリーの片思いはうまくいき、この緊急事態に頼もしい恋人が側にいてくれるということになるのだろうか。

思わず、じいっとカスパーの顔を見てしまったサリーの視線に気がついて、カスパーは照れくさそうに微笑んだ。

「え、あ、まあ、そういうことなんだけど」

「よかった。エミリーは、ずっとあなたが帰ってくるのを待っていたのよ」

「あはは。知ってたのか」

「本当によかった。きっとすぐにエミリーも立ち直れるわ」

「ちょっと相談なんだけどさ」

少し声をおとし、カスパーは真剣に何か考えている顔で、椅子に腰を下ろす。

サリーと目線の高さをあわせ、内密の相談という体勢になった。

「思い切って、エミリーを海外旅行に連れて行こうかと思うんだ」

「今すぐに？」

「気分転換になるだろ？ 俺は休み残っているし。エミリーは仕事辞めたいみたいなことを言っているしさ」

「……………」

エミリーが仕事を辞めるというのは、サリーにはショックだった。

仕事を辞めようと考えていたのはサリーの方で、エミリーが元気に復帰してきたら、すぐにそうしようと思っていたのだ。

「すぐには辞めないと思うから、休暇ということになると思うけど、そうするとサリーに負担がかかるだろう？」

「そんなこと、全然構わないわ」

「無理していない？」

「大丈夫よ。それに、気分転換に旅行って、いい考えだと思う」

「……でもさ、エミリーは一応、第一発見者だろう？ このタイミングで海外に行くのって、どうかなと思うんだよ」

カスパーが本当にエミリーのことを大切に思ってくれていて、サリーは嬉しかった。  
二人きりで旅行をすれば、きっとエミリーも元気になってくれるだろう。

「警察からは、旅行なんかで長期不在になるときは、連絡先を教えてほしいと言われているわ。旅行に行くなとは言われていないから、大丈夫だと思うわよ」

勿論、そんなことは言われていないのだが、警察がどう言うかなんて、サリーには聞かなくてもわかる。

「そうか。ありがとう」

「どこに行くのかは、もう決めているの？ チケット、手配しようか」

「これから、エミリーと相談して決めるよ。ありがとう」

エミリーが心配だからと、カスパーはすぐに帰っていった。  
その前に、上司に休暇申請をだすのを忘れなかったが。

(エミリーには会っておきたかったけどな……)

最後に別れたとき、エミリーはひどく混乱して、興奮している状態だった。  
冷静に対処していたサリーを頼っていたが、同時に奇異の視線を向けてもいた。  
同類だと思っていたサリーが、実は違っていたのだと気が付いて、驚き恐怖しているようだった。

エミリーが殺人事件の第一発見者になったのは、サリーのせいじゃない。誰のせいでもない。  
ロッシュはそう言うだろうし、エドウィンだってそうだろう。  
だが、ごく普通の平和な生活の中にいる人々が、自分の目の前で、否応なく非日常的な凄惨な事件に巻き込まれていくのを何度も見ていれば、その凶運をもたらしたのは自分に他ならないとしか思えなくなる。

自分の存在が事件を引き寄せ、周囲の人々を巻き込んでいるようだ。

(エミリーに謝りたかったけど)

それに、仲良くしてくれたお礼も言いたかった。

だが、優しい恋人が側にいる今、自分が会いに行っても、事件を思い出させるだけ。

しかも、また何かの事件に巻き込んでしまっただけは、本当に申し訳ない。

(もう、こういう仕事、辞めた方がいいんだよね……)

平凡で平和な環境の中にいたら、もしかしたら、何もおこらないかもしれない。

誰も不幸にせず、自分もならず、ごく普通に生きていけるかもしれない。

この前のイベント会社では、十ヶ月も平和な日々が続いた。

もしかしたら、このまま望み通り、パンドラなんていうありがたくない呼び名から逃れられると思った。

だが、やはり事件はおきて。今度の職場では、半月しかもたなかった。

(でも、やめてどうしよう)

刑事に戻ることは、考えたこともない。

私立探偵として開業したところで、パンドラの異名を持つ自分に、捜査依頼など来るのか疑問だ。

ロッシュと一緒に情報屋するかと言ってくれているが、そこまで甘えてしまっていいのか、迷いがある。受けるつもりはない。

(どんどん居場所がなくなる。……当然かもしれないけど)

ため息をひとつつき、サリーは気持ちを切り替えると、仕事を再開した。

六時過ぎになんとか仕事を終わらせて外に出ると、案の定、エドウィンが店の前で待っていた。

今夜は、サリーにあわせたのか、いかにも仕事帰りのエリートビジネスマンといった感じのスーツ姿。

それでも、彼本来の華やかさは隠しきれず、道行く人々の多くは、エドウィンを振り返っていた。

「五時には終わらないって、言っておいたのに」

ため息混じりにサリーが言うと、エドウィンはにっこりと微笑み、手を伸ばしてサリーの髪止めを抜き取った。

「ちょっと」

「俺の前ではしないこと」

と、メガネも持って行かれてしまった。

そして、エドウィンの手の中から、メガネはいつの間にか消えてしまっている。

その鮮やかな手並みに、サリーは文句を言う気力を失ってしまった。

「早く終わったね。七時に予約してある店があるから、行こうか？」

「何時に終わるかわからないって言っておいたのに」

無駄になってしまう予約をとってもらっていたのが申し訳なくて、でも素直にそうは言えず、サリーは怒ったように非難してしまった。

「だって、今夜はちゃんとした食事をしたかったからさ。六時にも八時にも予約入れといたんだ」

だが、エドウィンはそんなサリーの態度など気にせず、にこにこしている。

だから、サリーの中の小さな罪悪感とか、自己嫌悪とか、そんな感情は行き場を失ってしまっている。

ぷいと顔を背けて、サリーは歩き出す。

「すねないすねない」

すぐにサリーを追ってきたエドウィンが、ぎゅっとサリーの肩を抱いて、耳元で囁く。  
ぽっと、火が出るような勢いで、サリーは真っ赤になった。

「エド！」

「可愛いね、サリーちゃん」

ぴたりと足をとめると、サリーは真っ赤になりながらも、エドウィンをにらむ。  
エドウィンは小首を傾げ、サリーをととても楽しそうに見つめていた。

「今日は帰るからっ」

断言すると、エドウィンの表情が急に強張った。

「どうして」

「ロッシュに用があるの」

「どんな用事？ 電話やメールではすまないわけ？」

「大事な用事だもの」

エドウィンは仁王立ちになり、怖い顔でサリーを見下ろしている。

普段はあまり感じないが、エドウィンはかなりの長身で、サリーとでは、頭一つ分の身長差がある。

サリーは気圧されて、いつの間にか後じさろうとしていた自分に気が付いて、ぐぐっと気合いを入れ直した。

「この前の事件のことよ」

「それなら、俺も一緒に行く」

「なに言ってるの」

事件にエドウィンは何の関係もない。

それどころか、絶対に関わってほしくないし、関わらせるつもりだってない。

サリーがそう思っていることを、エドウィンだってわかっていると思っていた。

それなのに、事件のことなら、一緒に行くというのは、どういうつもりなのか。

「サリー。今日は俺との約束が先だろう？」

そのとおりなので、サリーはぐっと押し黙った。

エドウィンが強引に迫ってくるのなら、自分も強引なことだって出来るが、こうやって正攻法

で来られると、それも出来ない。

元々、サリーはとても真面目で、義理堅く、約束は破れないタイプだから。

「それに、君とロッシュが二人きりで会うのは感心できないね」

「私とロッシュは、そういう関係じゃないわ」

「わかってるけど。そういうのは理屈じゃないだろ？」

「エド」

「俺と一緒にロッシュの所に行くか。それとも、ロッシュとの用事は後回しにして、俺と食事に行くか。今の君に許された選択肢は二つだけだよ」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....」

「.....ロッシュのところに行くわ」

「了解」

途端ににっこりとしたエドウィンは、サリーの肩を抱いて、歩き出す。

なんだかもの凄く強引に決められてしまったような気がして、大切なことを忘れていたような気もして、釈然としないながらも、サリーはエドウィンに引かれて歩き出していた。

「をわっ」

サリーに続いて、部屋に入ってきたエドウィンを見つけて、ロッシュは珍妙な声をあげた。  
そして、椅子に座ったまま、エドウィンから逃げるようにのけぞったため、デスクの上の本の山を崩しそうになる。

「落ち着いて、ロッシュ」

「やあどうも～。ご無沙汰」

サリーは両手を腰にあて顔をしかめ、エドウィンはのんきに手を振りながら、テーブルの隙間に持参した夕食をのせた。

どういふことなのかと、ロッシュが視線でサリーに尋ねると、サリーは嫌そうな顔で肩をすくめた。

「他に選択の余地がなかったのよ」

「はあ？」

「邪魔はしないって約束したから。気にしないでくれる？」

それは、はっきり言って、激しく不可能だと、ロッシュは思う。

だが、エドウィンはまるでサリーの隣にいるのが当たり前のように振る舞い、ロッシュにも旧知の友人に対するようだ。

コップ借りるよと言って、さっさとキッチンに入っている。

「会っていたとは知らなかった」

「昨日よ。見つけたの」

「もしかして、事件のせい？」

「そうみたい」

エドウィンがキッチンからコップを三つ持って帰ってきたので、二人は話すのをやめ、なんとなく、エドウィンに視線を向けた。

「腹減っててさ。サリーが食事に行ってくれないって言うんで、ここで食べさせてもらうよ」

「だから、一人で帰って食べたら？」

「嫌だね。今日は君の顔を見ながら夕食するって、もう決めてあるんだ」

どうやら、車の中ですでに議論し尽くしてきたらしい。

啞然としているロッシュに、サリーはメールで知らせてくれた情報を教えてくれるように言った。

「食べながら話したら？」

と、エドウィンはテイクアウトしてきた中華料理を広げながら、二人に声をかける。

サリーとロッシュは顔を見合わせたが、ただよってきた食欲をそそる香りに、エドウィンが差し出してきた箸を受け取ってしまっていた。

「その、ホシなんだけどさ」

ロッシュはエドウィンの存在を気にしながらも、話し始めた。

「やっぱり、逃走中の姿を目撃されている。かなり慌てていたみたいだ」

「被害者のバッグを捨てていくぐらいなもの。でも、よく目撃情報が手に入ったわね」

「苦労したよ。あの辺りはライの目が光っているから、なかなか情報まわしてもらえなくてさ。ようやく。高くついたよ」

「ありがとう。ちゃんと付けておいてね。それで？」

二人は話しに集中し、エドウィンの存在を気にしなくなっていた。

エドウィンは自分の気配をできるだけ消すようにし、黙々と食事を続けていたが、勿論、耳はしっかりと二人の会話に集中している。

「まだ若い男らしい。二十代後半といったところかな。ブロンドで、あまりお堅い職業という感じではなかったそうさ」

「そんな条件に当てはまる男性は、星の数ほどね」

と、二人の視線は再びエドウィンに。

条件にぴったり当てはまる男は、にっこりとその視線を受け止める。

「俺のアリバイをご所望ですか？」

「結構です。それで、他に情報は？」

「それ以外にはなし。今のところは。もう少し時間かければ、まだ何かわかりそうな雰囲気ではあった」

「そう……。警察の方はどう？ 進展があった？」

「まだないな。動いてはいるみたいなんだが」

これでは、まだ何もわかっていないのと同じだ。

だが、エミリーが旅行に出ることがわかっていたので、サリーはそれほど焦りを感じなかった。

エミリーさえ無事ならば、それほど事件を急いで解決する必要はないのだから。

旅行から帰ってくるまでに解決していれば、エミリーもきっと新たな気持ちで普段の生活に戻るだろう。

「被害者の女性は、小さな露天で果物を売っていたらしい」

箸をとめ、エドウィンが話し出す。

「実家が果物農家。収穫の一部を観光地で露天を開き、観光客相手に売っていたらしい」

「ちょっと、エド。どうして、そんなことを知っているの」

「調べたから」

「どうして調べたりするの！」

「そりゃ、君が巻き込まれた事件だから」

サリーはテーブルに両手をつき、エドウィンの方へと身を乗り出す。

いつもポーカフェイスのサリーには珍しく、怒りを露にしていた。

にらまれているエドウィンは、逆に冷静に、そんなサリーをじっと見つめている。

「私は、あなたを事件に巻き込みたくないの」

「それは聞いたよ。そのために、俺のところから逃げ出したこともね」

「な、なにか誤解していない？ 今、私があなたから逃げ出さないのは、あなたを事件に巻き込んでもいいと思っているからじゃないのよ？」

「そうだろうね。君のことだから、何があっても俺を守りきろうという覚悟と、俺への罪悪感で一杯といったところかな」

「わかっているなら！」

ふと、エドウィンが口の端をあげる。

どこか飄々としていた彼の雰囲気、それだけでひどく剣呑なものに変わった。

「君こそ何もわかっていない。俺は言ったね。俺は君に守られるような男じゃないし、君を守ることだって出来るんだと」

「あなたはまだわかっていない。私がどれほど」

「ひどい事件体質か？ だいぶ知っていると思うけど。それに、君がどれほどひどい事件に巻き込まれているか知っても、俺は逃げるのではなく、逆により一層、君を守らなければならないと思うだけだ。それから、俺にはそれが出来ると君に信じて欲しいから、時間をくれとも言ったぞ」

「……………」

「逃げたのは誰だ」

サリーは唇をかむ。

エドウィンから離れようとした自分の行動を後悔などしていないが、約束を破って、一方的に出てきてしまったのはいいことだとは思えないから。

結局、エドウィンとの話し合いを今日まで引き延ばした結果にしかならず。

それまでに、自分の中のエドウィンに対する気持ちの整理をつけようとも思っていたのに、それも出来ず。

「俺は君を守る。それによって、自分が傷つくこともない。約束する」

その言葉を嬉しく思う自分がいる。

それと同時に、そんなことは絶対に駄目だと思う自分もいる。

もしかしたら、大丈夫かもしれないと期待するのと同時に、それはあまりにも危険すぎる賭だと恐怖する。

結局、自分の中で答えが出ていないから、中途半端な態度になってしまう。

きちんとエドウィンの説得して別れるか、断固として拒絶するか、それともエドウィンを受け入れるか。決めなければ。

(それが出来れば、こんなに困らないっ)

これも中途半端な、どうしょうもない選択だとわかっている。

サリーはエドウィンに背を向け、その場を逃げ出していた。

「サリー！」

エドウィンはすぐにサリーの後を追おうとしたが、ロッシュに腕を捕まれた。

「おいっ」

「まあ、待ってっ」

そう言っている間に、玄関の扉が乱暴に閉ざされる音が響き、部屋の中は静かになった。

「今、あいつ捕まえても、まともに話しできないって」

「だからって、ここらへんはあまり治安がよくない。サリー一人じゃ」

「それも平気。ここらの奴は、サリーがあのパンドラだって、よく知ってる。サリーを見て逃げ出そうとしても、関わり合いになろうという奴はいない」

エドウィンはむっとした顔で、ロッシュをにらんだ。

「情けねえ」

「言うなって。俺等みたいなのは、運とかジンクスとか、結構、気にすんだよ」

ロッシュが腕をはなしても、エドウィンは動かなかった。

深いため息をひとつこぼし、どさりと椅子に腰を下ろす。

「あんた、マジなんだな」

「そう言わなかったか？」

「すまんが、知らなかった。ブリザック警視に連絡もらった時にわかってるべきだったかな」

エドウィンが買ってきたウーロン茶をコップに注ぎ、ロッシュは少し考え込むように俯いた。

「あいつもさ、色々あんだよ」

「だろうとは思うよ」

「守ってやるってのは、あいつにとってはすげえ複雑な言葉なんだな、きっと」

「複雑？」

「ああ。過去にさ、あいつに向かって、守ってやるって言って、それを実行したのって、どれぐらいいると思う？」

「それは、過去にどれぐらい男がいたかって話？」

嫌そうに顔をしかめたエドウィンに、ロッシュは低く笑った。

「違う。それを言った男は結構いたと思うぜ。あいつ、美人だからな。だが、実行できた男は、いなかったと思う」

「それなら、……ご両親？」

「そう。サリーを守るために死んだ」

お茶を飲もうとした手を止め、エドウィンはゆっくりとロッシュを見る。

「事故で亡くなったとは聞いていたが」

「事故ってことになってる。強盗殺人だな。しかも、連続犯。夜中に自宅に侵入されて、ご両親はサリーを逃がして警察に連絡させたそうだ。サリーと警察が戻ったときには、死体が三つ」

「……………」

「サリーの父親は、武道の心得もあったそうなんだが、刃物持った犯人を、妻と娘守りながら取り押さえることは出来なかったんだな。ブリザック警視は、当時、この連続犯の捜査本部長だった。さっさとホシをあげときゃあ、サリーの両親が犠牲になることもなかったと思っただらしい。一人残されたサリーの保護者になることで、彼なりの償いをしている」

やりきれないといった表情で、ロッシュは顔をしかめ、お茶を少し口にした。

「あともう一人いる」

「ロブだな？ 警察時代の同僚の」

「そうだ。ロブは、サリーを娘のように可愛がっていた。サリーの才能を認めていたしな。警察の中で、まだまだ若いサリーが、あれだけ活躍できたのは、ロブのおかげだ。ロブはすげえタフで、サリーが持ってくる厄介ごととも難なくクリアしてたんだが。あの自動車事故だ」

「後遺症が残ったんだな？」

「……右腕の神経、失った」

エドウィンとロッシュは、しばらく黙り込んだ。

「で？ 俺が、ご両親やロブのようになるって、あいつは考えているわけ？」

「そういうことだ」

ため息をついたエドウィンに、ロッシュは苦笑をもらす。

「そういう顔すんなよ。サリーにとってはさ、両親もロブも、すっげー大切な存在だったんだ。多分、自分自身よりも大切。それなのに、自分のせいで失ってしまったから、臆病なんだよ」

そして、サリーはエドウィンのことを愛しているのではないかと、ロッシュは思っている。サリーが口論の途中で逃げ出していくところなど、初めて見た。

きっと、サリーはとても苦しんでいるのだ。

誰よりも大切に失いたくない人だから、だからこそ、臆病になって。

「自分のせい、ね」

「それについては、俺だって意見したいさ。だが、サリーがそう思っているのは事実だし、確かに、彼女の凶運は並じゃない。なんか取り付いてんじゃないかと、マジで思うな」

エドウィンはテーブルに肘をつき、じっと何かを考えている風だった。

沈黙が続いても、居心地の悪さを感じないことに少し驚きながら、ロッシュは冷めてしまった夕食に箸をのばす。

「俺はさ。強運の持ち主なんだよ」

ふと。唐突に言い出したエドウィンに、ロッシュは視線だけ向ける。

「そんな感じだな」

「多分、サリーの凶運をカバー出来ると思う」

「そうしてやってくれ。期待してる」

「おうっ」

にやっと、不敵な笑みを浮かべ、エドウィンもロッシュにならって、箸をのばそうとする。その時、エドウィンの携帯がなりはじめた。

「失礼。ちょっと出るな」

いつの間にか、エドウィンの手の中に携帯が現れ、モニターを確認したエドウィンは通話ボタンをおした。

「もしもし、俺。どうかした？」

「今、大丈夫ですか？」

電話は、パートからだった。

「ああ、急ぎ？」

「少し気になる情報が入りました。犯人の目撃情報なんですが」

「二十代後半でブロンド？」

「ライに会ったんですか？」

「まさか。今、ロッシュのそこ。彼から聞いた」

「そうでしたか。先程、ライから連絡がありました」

げ。っとうめいて、エドウィンは顔をしかめた。

ロッシュが不思議そうに、そんなエドウィンを見ている。

「私が情報集めていることに気づかれましたね。色々聞かれましたが、はぐらかしておきました。でも、彼は情報をくれましたよ」

それは嬉しいが、どれほど高くつくのか想像して、エドウィンは非常に嫌そうな顔になる。

「二十代後半のブロンドの男。目はグリーン。スーツではなく、カジュアルな格好。それなりに、整った顔立ち。今、似顔絵を作ってくれているそうです」

「.....そりゃ、ありがたいな」

「それから、犯行後、酒場に寄っています。トイレに駆け込んだそうで、多分、手の血を洗い落としたのでしょう。返り血はそれほどなかったはずですが、多分。それで、カムフラージュのためか、一杯だけひっかけていっています。その時、犯人は非常に怯えていたそうです」

「何に？」

「見られたと、犯人は言っていたそうです」

「.....なるほど」

つぶやき、エドウィンは指先を唇にあてる。  
考え込むときの、無意識の動作だ。

「エミリーの護衛はちゃんと付いていますので、ご心配なく」

「報告、きてるか？」

「きています。アパートにこもりきりだそうです。来客は一人だけ。カスパーという同僚の、恋人のようですね」

「わかった、ありがとう。また連絡する」

電話を切り、その携帯を手の中から消してしまう。

こちらへの動作はエドウィンにとってほとんど無意識なのだが、見ていたロッシュは、その鮮やかさに感嘆していた。

「今のが、あんたの情報源？」

「まあ、そんなところ」

「ぜひ、出所を聞きたいもんだな」

バートの話は、ほとんど聞こえなかったのだが、自分が掴んだよりも更に詳しい情報がエドウィンにもたらされたのはわかった。

情報屋としては、大いに気になるところだ。

「あんたも情報屋なら、自分で調べな」

むっとするロッシュを無視して、エドウィンは再び考え込む。

見られたという犯人の言葉が、ひどく気になるのだ。

見られたと怯えるのだから、やはり、犯行現場を見られたということだろう。

とすると、見たのは、第一発見者のエミリー？

だが、彼女は逃げ去る犯人の背中だけしか見ていないと証言している。

(それが嘘だったら？)

犯人を見てしまったのが怖くて、エミリーは咄嗟に嘘をついてしまったのかもしれない。

また、殺人事件に関わるのが嫌で、嘘をつくということもあるだろう。

だが、犯人が見られたと自覚している限り、エミリーは危険だ。

保身のため、犯人はエミリーに近づくかもしれない。

(.....護衛がついている。大丈夫だ)

それに、犯人が見られたと思っているだけで、エミリーは本当に見ていないのかもしれない。いつまでもエミリーが警察で証言しなければ、犯人だって、エミリーに近づこうなんて危ない橋は渡らないだろう。

「なに考えてんだよ」

ぶすりと、ロッシュが言う。

「事件のこと」

「ああ。今回は、たいしたことなくてほっとしたぜ」

「もう解決したみたいないぐさだな」

「サリーにとっては、半分終わったようなもんだ。今回、巻き込まれたのは、第一発見者のエミリーだけだからな。パンドラにしては、上等だ」

「パンドラにしては、ね」

くっくっくっとロッシュは笑い、エドウィンは呆れた顔をする。

(パンドラの凶運は本物です)

不意に、いつだったか、バートが言ったことを思い出した。

そして、サリーに逃げられたとき、もう二度と、彼女に関しては、ほんのわずかな隙だって許されないと知り知ったことも。

そう。サリーに関しては、どんなことだって、甘く考えてはいけないのだ。  
でないと、サリーを失うことになる。

(何か見落としていることはないだろうか)

今のところ、被害者とサリーには何の関係も見つけることは出来なかった。

目撃者のエミリーも、問題ない。

今回は、サリー自身も怪我などなく。

(もう、甘かったと後悔すんのだけはごめんだからなあ)

その時を思い出し、エドウィンは顔をしかめる。  
そして、何か見落としはないのかと、考え始めた。

ロッシュの部屋を飛び出したサリーは、大通りに出て、ようやく走るのをやめて歩き出した。人混みの中に入り、周囲に合わせて歩いていると、ようやく少し冷静になれた。

(エドの馬鹿)

まだ、あんなことを言っているなんて。  
守るなんて、馬鹿なことを。

まだちゃんとわかっていなかった時はともかく、今は色々知っているはずだというのに。自分の事件体質がどれほどのものか、ブリザック警視だって話したはずだ。

(……でも、私も悪いのよね)

エドウィンが諦めないこと、心のどこかでわかっていた。  
彼は怖気づいて逃げるような人ではない。逆に、立ち向かう人だ。  
だから、彼の前から逃げ出したのに。

再会して、ずるずる受け入れてしまったから。  
もっと断固として拒否すべきだったのに。  
それ以前に、もっと完璧に彼の前から姿を消すべきだったのに。  
名前をかえて、外国に出て、今までの自分と縁を切るべきだったのに。

(でも、出来なかった)

きゅっと唇をかむ。

彼を失いたくない。  
ずっと側にいたい。  
でも、側にいたら、彼を失ってしまうかもしれない。  
自分のせいで彼を失ってしまったら、そんなことになったら……。

涙が零れ落ちそうになって、サリーは強く目を閉ざした。

心の中がぐしゃぐしゃ。

理性的に判断したいのに、エドウィンのことだけは、それが出来ない。いつも感情に引き回される。

物凄く苦しいのに、それなのに、エドウィンに見つめられると、抱きしめられると、とてつもない幸せを感じる。

多分、間違いないと思う。

間違いなく、エドウィンを愛してしまっているのだ。

(ああ。どうしよう)

今ほど自分の凶運を呪ったことはない。

そして、エドウィンを愛してしまった自分をも呪った。

携帯が鳴り出し、サリーは歩きながら通話ボタンを押す。

「サリー？」

聞こえてきたのは、思いがけない人の声だった。

「エミリー？ エミリーなの？」

「ええ、私よ。よかった、通じて」

サリーは歩道の端に寄って、立ち止まった。

「大丈夫？　すごく心配しているのよ。カスパーから話は聞いているんだけど、心配で。旅行に行くんですって？」

「心配してくれてありがとう。サリー、あのね、話があるの」

エミリーの声は小さく、いつもより早口だった。

どこか怯えているようにも感じられる。

やはり、まだまだ本調子ではないのだと、サリーは心が痛んだ。

「いいわよ。私でいいなら、なんでも聞くわ」

「電話では話せないの。会いたいわ。今からいい？」

「ええ、いいわよ。私が会いに行くわ」

「それは駄目」

きっぱりと早口に否定されて、サリーは眉をひそめた。

何か、エミリーの様子はおかしい。

はっきりとは言えないし、あんな事件の後だからかもしれないが。

「私のアパートの近くに、いいお店があるから」

エミリーは店の名前と場所を告げると、待っているからと、すぐに電話を切ろうとする。

「ちょっと待って！ エミリー、どうかしたの？ 何かあったの？」

「何もないわ。話がしたいだけよ」

「カスパーは？ 彼はもう帰っているの？」

「まだよ。それじゃ、待っているから」

今度は引き止められず、エミリーは電話を切ってしまった。

(何かあったのかしら.....)

サリーは眉をひそめるが、考えていてもわからない。

とりあえず、エミリーに会おうと、指定された店へ行こうと歩き出す。

ロッシュに連絡しておいた方がいいだろうかと、ちらりと考えた。

だが、今、ロッシュに連絡したら、エドウィンにも伝わってしまうだろう。

彼はきっと心配して、こっちに来ようとするのは間違いない。

(危ないことはないわ。エミリーと話すだけだし)

今の、このぐちゃぐちゃな気持ちのまま、エドウィンに会いたくはない。

ぱちんと携帯を閉ざすと、サリーは一人で歩きだした。

ずっと黙っていたエドウィンがいきなり立ち上がったので、ロッシュは驚いた。

「行くわ。邪魔したな」

「って、おいっ。どこ行くんだよ」

そのまま大股で歩き出したエドウィンの背中に、ロッシュは声をかける。

「今日はサリーに会わない方がいいと思うぞ！」

「サリーじゃない。第一発見者のエミリーって子のとこだ」

「はあ？」

足を止め、エドウィンは肩越しにロッシュを振り返る。

「なーんか、嫌な感じがするんだよ」

「どんな？」

「よくわからん。……しいて言えば、この程度ですんでいいのかって感じか」

「ますますわからん」

「俺が聞いたサリー絡みの事件は、どれもこれも、もっと悲惨だった」

「確かにな。あんたの発砲事件が一番軽かったんじゃないか。あと、今回のと」

「だから、今回ももっと何かあるかもしれない」

「……………」

「なんかこう、胸のあたりがモヤモヤする」

「そういうカンは、大切にしたい方がいい」

と、ロッシュも立ち上がり、サイドボードの上の携帯や鍵をつかんで、ポケットに押し込んだ。

「一緒に行く。車だろ？」

「ああ」

二人は一緒に部屋を出る。

階段をおりる足は自然と小走りになり、エドウィンの車には走って向かった。

「流石。いい車乗ってんなあ」

路駐してあったエドウィンの車は、流線型の銀色ボディが美しいスポーツカーだった。

「しかし、こんな所にとめて、よく盗まれなかったな」

「俺、運はいいからね」

重低音なエンジンと共に、エドウィンは猛スピードで車をスタートさせた。

「をををををいっ」

車が走り出して数分後、ロッシュは顔を引きつらせ、存在を確かめるようにシートベルトを何度もさわっていた。

エドウィンの運転は、それはそれはもう、荒っぽかったのだ。

「ぎよえええっ」

交差点、黄色で猛スピードで突っ込み、タイヤの音を立てて右折。

反対車線のドライバーが、目を丸くして、エドウィンの車を見送っている。

「情けない声だすなよ」

「だ、だからって、おいっ」

「カンは大切にしないと」

エドウィンだって、普段はこんな運転をしない。

自慢じゃないが、無事故無違反の模範的なドライバーだ。

だが今は、どうしても胸騒ぎが止まらない。何か見落としがあるようで。また、サリーを見失ってしまいそうで。

それが気のせいだと確かめられれば、それでいい。

エミリーのアパートの前に車を止め、二人は二階のエミリーの部屋へと階段を駆けあがる。

どこかにいるはずの護衛を、エドウィンは周囲を見回して探してみたが、見つからなかった。

ちょっと見ただけで見つかるようでは困るので、それでいいのだが。

呼び鈴を押しても、中から反応がない。

ピンポンという音が、部屋の中で響いているのが薄いドア越しにわかるのだが、鍵が開く音はいつまで待ってもしない。

「留守かな」

首をひねるロッシュの横で、エドウィンは携帯を出して、バートへと電話をかけた。

「はい」

「あ、俺。今、エミリーの部屋の前なんだけど、留守らしいんだ。護衛と連絡とれるか？」

「わかりました。そのままお待ちください」

ロッシュが驚いた顔でエドウィンを見ている。

聞きたいことがあるのはわかるが、今は黙っていてほしくて、視線で伝える。

どうやらわかってくれたようだ。

「お待たせしました。エミリーは十分前に出かけたそうです」

「一人で？」

「はい。少し慌てていた様子はあったようですが、取り立てておかしいという感じではなかったようです。今、護衛の一人が彼女の後を追っています。行き先がわかり次第、また連絡します」

「よろしく頼む」

電話を切ると、待っていたロッシュが口を開いた。

「護衛つけていたのか」

「念には念を入れてね」

答えながらも、エドウィンは指先を唇にあて、ドアを睨みながらなにやら考えている。

「あんたって、よくわかんねえ男だよな」

「わかりやすいと思うけど」

「一見、わかりやすい。というか、わかったような気になる。あんたは多分、自分をどう見せるのかちゃんと意識してるんだ。だが...っおい。何してる」

考えていたエドウィンだったが、何を決めたのか、どこからか怪しげな道具を取り出した。

そして、ドアの鍵の前に跪き、その細長い道具を鍵穴に差し込んでいる。  
何をしているのか、明白である。

「いいのか。おいっ」

だが、ロッシュが慌てて止める間もなく、鍵は軽い音を立てて、あっけなく開いてしまった。

「すげえ。なんでこんなこと出来るんだよ」

「マジシャンの基本。これが出来なきゃ、脱出マジックとか出来ないだろう」

ドアに仕掛けがないか、エドウィンは一応確認しつつ、そっと扉をあけた。

玄関に入ってすぐにキッチンなどの水回りがあり、奥に一部屋という、一人暮らしの典型的なアパート。

エドウィンとロッシュは、真っ暗な部屋の中に、そっと足を踏み入れた。

「.....なんとなく、嫌な感じだ」

つぶやいて、ロッシュはきよろきよろ部屋の中を見回している。

部屋の中の空気はよどんでいて、どことなく病的な感じがする。

女性の一人暮らしにしては、衣類やゴミなどが片づいていないようだ。

「変だ」

キッチンで流し台の上に放置されていたゴミを見ていたエドウィンは、そうつぶやいて、顔をしかめている。

「恋人と一緒にいて、ゴミをここまで放置するか？」

「それはまあ.....。普通じゃない精神状態だからなあ」

弁当の空き容器らしいゴミは、ポリ袋に詰め込まれている。

残飯もそのまま入っているし、プラスチックも紙も一緒に分別されていない。

キッチンには、きちんと分別用のゴミ箱が並んでいるというのにだ。

「ロープ？」

エドウィンは暗い部屋の奥、窓際に丸められたロープの固まりに目を細めた。

大股で、できるだけ部屋の中に触れないようにして、ロープに近づく。

のぞき込み、ロープの端が鋭利な刃物で断ち切られていること、反対側の端がテレビ台の足に結ばれていることを確認した。

「嫌な感じだな」

エドウィンの肩越しにそれを見て、ロッシュが顔をしかめた。

「ああ、嫌な感じだ」

エドウィンの携帯がなりだした。

すぐに出ると、バートだった。

「行き先がわかりました。少しわかりにくい所なので、住所を調べました。カーナビで行ってみてください」

と、バートはその住所を言う。

エドウィンはその場で覚え、復唱して確認した。

「どうやら、誰かと待ち合わせをしているようです。護衛はついていますが、何か指示を送りますか？」

「とりあえずいいよ、ついていてくれれば。ロッシュと一緒に、エミリーに会いに行く」

「わかりました」

エドウィンの胸騒ぎはますます強くなっていた。

「急ごう」

ロッシュも強く頷き、二人は慌ただしくアパートを飛び出していった。

サリーは、電話を受けてから三十分ほど後、ようやくエミリーに指定された店の扉を開けた。土地勘のない所だったので、店を探すのに、少し手間取ってしまったのだ

待ち合わせをしていると告げると、ウェイターはエミリーの席に案内してくれた。店の奥まった席にいたエミリーは、やってきたサリーを見て、軽く目を見張った。

「まあ、サリー。そうしていた方が、絶対にステキよ」

「え？」

そういえば、エドウィンに髪をおろされ、メガネもとられたままだった。

「あなたって、とっても美人だったのね」

「そ、そんなことないわよ」

顔が赤くなっているのを感じて、サリーは俯きながら椅子に腰を下ろした。

そして、渋々顔を上げると、エミリーの顔色がよくないことに気がつく。

店内の照明は暗く、二人の席は奥まっているから更に暗いのだが、それでも、目の下にクマがでているのがわかった。

「……元気そうね、とはとても言えないわ。大丈夫？」

「大丈夫よ、ともとても言えないかも」

弱弱しくエミリーは微笑を浮かべたが、それもすぐに消えてしまう。

「カスパーから、あなたの様子は聞いていたの。お見舞いに行こうとも思っていたのだけど、私と顔を合わすと、思い出すかもしれないと思って」

「ありがとう、気を使ってくれて。仕事も一人で大変でしょう？」

「そんなこといいのよ」

エミリーはコーヒーのカップを両手で包み、俯いてしまった。

だからといって、サリーに対して心を閉ざしているという雰囲気はなく。

どう話そうか悩んでいるか、話しだす勇気が足りないのか、そのどちらかのように見えた。

「旅行に行くんですって？」

エミリーは驚いた顔をあげて、サリーを見る。  
その驚きように、サリーのほうに驚いてしまった。

「カスパーが言っていたわよ？ 休暇とって、気分転換に旅行に行くって。仕事……やめるかも  
って」

「……………」

「気分転換は必要だと思うわ。南の島にでも行って」

「サリー」

思いつめた、低い声で言われ、サリーは口を閉ざした。  
そして、静かにエミリーの目を見つめ返す。

「サリー。こんなこと、誰にも相談できなくて……。それに、あんな現場を見た人じゃなきゃ、  
私の気持ちもわかってもらえそうにないし」

「ええ」

「それに、あなたはとても落ち着いていたわ。ずっと私を励ましてくれてた」

「私、元刑事なのよ」

言うかどうか少し迷ったが、サリーは思い切って言ってみた。  
その事実が、エミリーの口を軽くするか、閉ざしてしまうか、賭けだった。

「そう……なの」

「今はもう関係ないけど。前の仕事の、その前に、警察で働いていたの。慣れているとは言わな  
いけど、ああいった現場を見るのは初めてじゃないから」

「そう……」

エミリーは気が抜けたようにつぶやき、椅子の背もたれに寄りかかった。  
俯いて黙りこんでしまったエミリーに、サリーは賭けは失敗だったのだろうかと思いはじめ  
る。だが、エミリーはようやく顔を上げ、話し出した。

「私ね。本当は犯人を見てしまったの」

サリーは息を呑む。

安全だと思い込んでいたエミリーが、そうでなかったのだとわかった衝撃は大きくて、サ  
リーのポーカーフェイスは壊れてしまった。

「怒ってる？ 呆れるかな。警察に嘘を言って」

そんなサリーをどう思ったのか、エミリーは涙ぐみながら俯いてしまった。

「違うわ。エミリー、違うの。怒ってるわけじゃないわ。驚いただけ」

「そう？」

「ええ。見たものを見ていないという人も、見ていないくせに嘘の証言をする人も、たくさんいるわ。そんなに気にしないで」

「そういうものなの」

「そんなことより、犯人にも見られたの？ あなたが犯人を見たということを、犯人にも知られたの？」

勢い込んで聞いたサリーに、エミリーは驚き、ちょっと引いてしまっている。

普段、常に冷静沈着なサリーが、こんな風に取り乱すなど、初めて見るからだ。

そして、サリーは、ポーカークフェイスを忘れるぐらいに、激しく動揺していた。

今回は何事もなく終わるのだと思っていたから。

誰にも迷惑をかけず、事件は終わるのだと、そう安心していたから。

だからこそショックは大きく、そして、簡単に安心していた自分が悔しくて、ひどく責めて。余裕がなかった。

「……目があつたから」

「エミリー」

「あのね。カスパーだったのよ」

サリーは声を失い、エミリーは泣きそうな顔で微笑んだ。

「……エミリー」

何を言っているのか、サリーはわからなかった。

刑事をしていた時から、被害者やその家族と接するのは苦手だった。

いつも、そういう役は、ロブが引き受けてくれていた。

その痛みがわからないわけではない。

ただ、もっと多くの、そして大きな痛みを経験しているサリーは、それを乗り越えるために強くならざるをえなかった。

だから、少し痛みに対して鈍感になっているのではないか、それで何か傷つける不用意な言葉

を口にしてしまわないかと、とても慎重になる。

常に周囲の人々を不幸にしている自分が、痛みに苦しむ人にどんな声をかけられるのかという気持ちもあって、サリーはこういう時、いつも以上に無口になってしまう。

「ごめんなさい、私、気が付かなくて」

迷って、困って、いつも謝罪の言葉しか出てこない。

「馬鹿ね、何を言っているの、サリー。気が付くわけじゃない」

エミリーはテーブルの上のサリーの手に手を重ね、ぎゅっと力を入れて握りしめてくれた。

「ああ、それに私、カスパーに、あなたの側にいてあげてほしいってお願いしたわ」

もしかして、昨日今日と、エミリーはカスパーと二人きりで、何かされていたのではないかと、サリーはぞっとした。

改めて、エミリーの姿を、上から下までしっかりと見る。

とりあえず、エミリーの体には暴行のあとはない。

「それもいいのよ。私かカスパーか、どちらからか連絡を取って会っていたと思うし」

「ひどいことされなかった？」

「されなかったわ。彼ね、私のことが好きなんですって」

この状況で、そんな言葉を信じられるわけがない。

そう思ったのが顔に出たのだろう、エミリーは苦笑をもらした。

「信じようと思っているの。彼女はね、えっと、その」

「ええ、わかるわ」

「.....彼女はね、以前、付き合っていた人なんですって。でも、ツアーで彼女の国に行った時だけ会っていたっていう、そういうお付き合いだったそうなんだけど。私に答える前に、彼女との関係を清算したかったんですって。でも、彼女は受け入れてくれなくて」

「追いかけてきたのね」

エミリーは小さく頷く。

「最後には脅迫されていたみたい。あんまりしつこくて、衝動的に」

カスパーの言葉は本当だろう。

彼のその後の行動が、計画性のない衝動的な犯行だったことを裏付けている。

だからといって、脅迫されていたとしても、彼の罪が消えてなくなるわけではない。

「それで、カスパーはどうするつもりなの？」

「混乱しているわ。当たり前よね。興奮状態で、ちゃんと考えられないみたい。どうしてこんなことになったんだって、そればかり言っているの」

「旅行に行くって言っているのは、国外逃亡するつもりなのかもしれないわ」

「ええ、そのつもりだと思うの。このまま、あれはなかったことにしたいって、彼は思っているのよ。でもね、サリー」

いつの間にか刑事の顔つきになっていた、断罪者のように厳しい表情のサリーの手を、エミリーは優しくぎゅっと握りしめた。

「彼は本来、そんな人じゃないと思うの。冷静に戻れたら、きっと今の自分を後悔すると思う」  
「自首させたいのね？」

エミリーは力強く、頷いた。

そんなエミリーに、サリーも強く頷いてみせる。

「旅行に出るなんて、かなり切羽詰っているんだと思うわ。今日、会えてよかった」

「本当に。カスパーはまだ帰っていないのね？」

「ええ」

これからどうするか、サリーは眉を寄せ、考える。

まず第一にエミリーの安全。カスパーに自首させることは、二番目。

追い詰められているというカスパーの精神状態を考えると、慎重にやらなければと緊張した。

「とりあえず、応援してくれる人を呼んでもいい？ それで、エミリーはその人と一緒に居て欲しいの。カスパーの説得は、私一人ですから」

だが、エミリーは首を横に振った。

「カスパーは、私には側に居て欲しいと願っているの。病的なぐらい」

「でも、エミリー」

「部屋から出ないようにって、言われているのよ。裏切るなって」

「……………」

「今日、彼が出かけるときね、足首にロープをかけられたわ」

息を呑んだサリーを、エミリーは落ち着かせるように、にっこりと微笑んだ。

「大丈夫。ロープは、部屋の中を歩き回れる長さにしてくれたし、拘束されていたわけじゃないの。現に今、私は部屋を出てここにいるでしょう？」

「でも、エミリー」

「うぬぼれかもしれないけど、今のカスパーは、私が側にいることで、なんとか安定しているかもしれないわ。私……部屋を出てくるべきじゃなかったかもしれない」

と、エミリーは顔を強張らせ、腰を浮かした。

「私、帰るわ。カスパーが帰ってくる前に帰りたいの」

焦っているエミリーを引き止めるのは困難そうだし、エミリーの言うことにも一理あると思ったサリーは、テーブルに代金を置くと、もう席を立ってしまったエミリーを慌てて追いかけて始めた。

「待って、エミリー」

走り出しそうなエミリーの隣に、サリーは駆け寄って、肩を並べる。

「お願い。彼のことは私に任せて」

「ありがとう、サリー。でも、私が思っていた以上に、彼は追いつめられているみたいだから。まずは、私が話してみる」

「でも」

「大丈夫よ。一緒に来てくれる？」

「それは勿論」

サリーは、自分がかかなり焦っていることを自覚していた。

この事態は、自分の油断による失敗のように思えて苦しい。

もっとしっかりしていれば。エミリーのことをカスパーに任せたりせず、ちゃんと顔を出していたらと思えて仕方がない。

そして、もうこれ以上、エミリーを危険な目にあわせたくなかった。

エミリーのためなら、カスパーを警察に引き渡したって構わないと、心に決める。

「エミリー」

ふらりと、細い路地から現れて、エミリーの前に立ちはだかったのは、カスパーだった。

エミリーはぎくりと立ちすくみ、サリーも驚きに足を止める。

カスパーは泣きそうな、怒ったような顔で、じっとエミリーを見つめていた。

「駄目じゃないか。外へ出ないでと言っておいたのに」

「ごめんなさい、カスパー。今、急いで戻ろうと思っていたのよ」

「サリーと会っていたの？」

カスパーの視線が、エミリーの背後にいるサリーへと向かう。

我に返ったサリーが、エミリーの肩に触れようと手を伸ばすと、カスパーは怒ったようにエミリーを自分の胸の中へと引き寄せた。

どうしようか迷ったサリーを、エミリーが肩越しに振り返る。

その目は、大丈夫だから、カスパーを刺激しないようにと言っていた。

だが、このまま黙ってエミリーとカスパーを行かせることなど出来ない。  
どうしても、エミリーだけは保護したい。  
だが、カスパーを自首させたいエミリーが、それに応じるはずもない。

「エミリー、まさか」

「大丈夫よ、カスパー。仕事のことで、サリーと話す必要があったの」

「そうか」

エミリーと話すにつれ、カスパーの表情に少し余裕が戻ってきた。  
微笑みらしきものさえ見える。

(どうして、一度でも、彼がエドに似ているなんて思ったのかしら)

エドウィンはもっと強い人だ。  
余裕を失って、愛している女性にすがりついて墮落していこうとする男とは違う。

「話があるのよ、カスパー」

サリーが言うと、エミリーがぎょっとした顔で振り返ってきた。  
カスパーは途端にまた余裕を失い、エミリーの肩をつかむ手に力がこもり、白くなった。

「エミリーは帰して。二人きりで話せない？」

「サリー」

「俺には君と話しなんてないよ」

「私にはあるの。そんなに時間はとらせないわ」

「サリー、明日では駄目？」

エミリーがすがりつくような目で見てるのがわかったが、サリーはどうしても今ここでエミリーを保護したかった。

追いつめられた弱い男が、エミリーにどんなことをするのか、わかったものではない。  
サリーは、カスパーを信用することなど出来なかった。

「ちょっと、すみませ〜ん」

エミリーとカスパーの背後、近づいてきた男が、この修羅場に気が付くことなく、のんきな声をかけてきた。

「ロツ……」

ロツシュと名を呼びそうになって、サリーは慌てて言葉を飲み込む。

エミリーとカスパーの二人をにこにこ見ているロツシュは、サリーに対して知らん顔をしている。

その態度が、サリーの介入を拒否していて、とりあえずサリーも口を閉ざした。

「ちょっと時間いいですか？ マジックに協力してくれるカップルをさがしてるんですよ」

「……マジック？」

エミリーが、この急展開に呆然としている。

それはカスパーも一緒に、そんな二人をいいことに、ロツシュは腕をつかんで、そのまま引っ張っていかうとしていた。

そして、サリーはマジックという言葉に、ぎょっとして目を見開く。

「ちょっと！」

サリーは慌てて、エミリーのもう一方の腕をつかむ。

だが、ロツシュは止まらない。

サリーとロツシュと、二人に引っ張られる格好になったエミリーが、困惑して足を止める。

「あ、あの、困ります」

「ちょーっとだけですから。変なことしませんし」

「君！ 俺達はそんなことをしている暇は」

カスパーが、ロツシュとサリーの腕を振り払い、エミリーを取りかえす。

そんな二人に、ロツシュは情けない顔をしてみせる。

「お願いしますよ～。どーしても、未婚の若いカップルの協力がないと駄目だって、うちのマジシャンが怒るんですよ」

と、肩越しに、視線を向ける。

その視線の先には、結構な人だかりが出来ていた。

人の輪の中心にいるのは、長身で金髪の男。顔の上半分をマスクで隠していたが、サリーには一目でエドウィンだとわかった。

「他の人をお願いして。この二人は忙しいのよ」

サリーは身を乗り出し、強い口調でそう言った。

この二人に、この事件に、エドウィンに関わらせるなんてとんでもない。

エドウィンとロッシュが何を考えているかわからないけれど、それだけはさせられない。

仁王立ちになって睨んでいるサリーを、ロッシュはあっさりとは無視して、エミリーとカスパーに更に話しかける。

「うちのマジシャン、人気あんですよ～。で、毎週、未婚の若いカップルに協力してもらってですね、ちょっとしたマジックをしまして」

「……………」

「どうです？ ちょっとしたプレゼントもありますから」

「いいわ」

カスパーは態度と表情で断固拒否をしていたが、エミリーが承諾した。

驚くカスパーの腕を引いて、ロッシュの後についていく。

きっと、サリーと押し問答するよりも、まだまだと判断したのだろう。

エミリーとカスパーを、人の輪の中心に連れて行くロッシュを、サリーは苛立ちと腹立たしさを抑えながら睨みつける。

(どうしてこんな余計なことを！)

エドウィンはともかく、ロッシュはサリーの気持ちをよくわかってくれていると思っていたのに。

(もう！)

悔しくて、ままならなくて、もうなにがなんだか、ぐしゃぐしゃで。

じわりとわきあがってきた涙を、サリーは手の甲で乱暴にぬぐう。

でも、きっと、ロッシュとエドウィンは、こちらの事情を知っている。

その上で、何かしようとしているのだろうと思う。

もう、それは始まってしまったのだから、こんな所で腹を立てている場合ではない。

危ないことになったら、すぐに飛び出せるように、サリーは人混みをかき分けて(かなり嫌な顔をされたが)、前の方に出た。

「おや。ようやく、ロー君が今日のカップルを捕まえてきたようです」

と、ロッシュとエミリー、カスパーの姿を認めて、エドウィンが言った。

すっかりエドウィンのアシスタントになっているらしいロッシュが、頭をかきかき情けない顔を見ると、くすくすという笑い声があがった。

「それじゃ、本日のメインイベントにうつるとしましょう」

今まで両手の指にずらりと挟んでいたスポンジボールを、一瞬で消してみせる。

それに対する観客達のどよめきを、あっさりと受け流し、エドウィンはその場に設置してある小さなマジックテーブルへと歩み寄った。

どうやら、自分が魔法使いと呼ばれるマジシャンだということを、この場では隠しているらしい。

顔の上半分をぴったりと覆うマスクは光沢のある黒で、目の色もわからないタイプのものだ。

スーツの上着を脱ぎ、シルクの黒いチョッキ、白いシャツは胸元を開き、ネクタイもゆるめていて。

それでも、エドウィンが整った顔立ちをしているのは隠せていなかったし、何よりも、やはり彼の持つ華やかさは隠せるようなものではない。

道端でのマジックショーは、そこを通る人がもれなく足を止める事態となっていて、どんどん人の輪は大きくなっている。

エドウィンのショーなのだから、当然だろうと思いながら、サリーは油断なくカスパーの動きを監視していた。

エミリーは勿論、エドウィンにまで何かあったら、後悔してもしきれないだろうから。

「さて。それでは、この二人が本当に愛し合っているカップルなのか、確認しましょう」

エドウィンは二枚のハート型な白い紙を取り出すと、観客に向かってひらひらと振って見せた。

「この紙は特別製。その名も、恋のリトマス試験紙！」

観客の笑い声が収まると、エドウィンはその紙をマジックテーブルに置き、エミリーとカスパー

一の二人を手招いた。

「今から、この二人に、紙に手を置いてもらいます。気持ちが本当なら、赤い手形が。ちょっと問題ある場合は、青い手形が残ります。では、覚悟はいいですか？」

二人の手を、濡れタオルで軽くしめらせると、エドウィンは紙に手をおくように促した。

いつのまに、こんな仕掛けを用意したのだろうと、サリーは首をかしげながら、二人が手を置くのを見つめている。

そんなサリーの横に、いつの間にか、ロッシュが来ていた。

「よお」

そ知らぬ顔で、そんな挨拶をするロッシュを、サリーは睨みつけたくなかったが、やめておいた。

視線はエミリーとカスパーに向けつつ、口だけ開く。

「事情は知っているのね？」

「まあね。一つ、確認したいんだが」

「なに」

「彼女は、自分の意思で、捕らわれていたんだよな？」

「ええ、そうよ」

サリーが答えると、ロッシュがエドウィンに目配せをした。

エドウィンは小さく頷いてみせる。

「ってことは、自首の相談に呼び出された？」

「ええ」

「サンキュ。それなら、あとは、あの魔法使いに任せときゃいいよ」

「ちょっと」

サリーは抗議したかったし、エドウィンとロッシュがなぜここにいるのか、その事情も聞いたかったのだが、ロッシュは聞くだけ聞くと、あっさり離れて行ってしまった。

「おおっと！ 大変だ！」

エドウィンの大きな声と、青く浮き出してきた手形に、観客がどよめいた。

もう一枚、エミリーの手形は、赤く染まっている。

「これはちょっと、彼氏をチェックしないと駄目なようですねえ」

「なっ」

こんな展開になるとは思わなかったのだろう、カスパーは驚いて声を上げた。

「それでは、彼女の方には、ちょっと離れていていただきますよう」

エドウィンが目配せすると、ロッシュがエミリーの手を引いて、観客の輪の外へと連れ出して  
しまう。

勿論、カスパーは驚いて焦りだした。

「お、おいっ。彼女をどこに連れて行くんだ！」

「まあまあ。彼氏の『愛』が確認できれば、ちゃんとお返ししますよ」

愛という言葉を強調し、エドウィンはカスパーの肩をぐわしっとつかむ。

「でないと彼女が可哀相でしょう？ 『愛』のない彼氏と一緒にいるなんて」

「……………」

そこまで言われては、カスパーとしても納得せざるをえなかったらしい。

不承不承という表情で、エミリーのあとを追うことを諦めた。

「それでは、この彼氏に何が足りないのか、探ってみることにしましょう」

くすくすと観客達が笑っている。

カスパーの少し怒りながらも困っている様子と、エドウィンの芝居がかった口調がミスマッチ  
しているからだ。

ちょっと間違えば陳腐になりそうなことを、エドウィンはコミカルに演じている。ここらへん  
は流石だ。

「一枚、引いてもらえますか？」

鮮やかな手つきでカードをシャッフルし、エドウィンはカスパーの前で扇状に綺麗に広げた。

カスパーが一枚抜くと、エドウィンはそのカードを見ずに、観客にだけみせてほしいと言った

。

言われたとおりに、カスパーが自分では見ず、カードを観客達に向かって掲げてみせると、ど

っと笑いがおこった。

カスパーの引いたカードには、コミカルな手書きで『浮気厳禁！』と書いてあったのだ。

「そのカードには、二人がこの先、結婚してもうまくいかないかもしれない要因が書いてあります。それをあなたが当てられたら、反省して懺悔出来たら、彼女をお返ししましょう」

「なんだって？」

「まあまあ。胸に手を当ててですね。彼女に対する自分の行いを思い返してみてくださいよ」

「どうして、俺がそんな」

「彼女を幸せにしたいでしょう？」

エドウィンは笑顔で、その口調さえ、どこかコミカルだ。

だから、これが本気のやりとりではなく、ショーの一部であることを観客は疑わないし、この場の雰囲気も決して堅くはならない。

「愛しているのでしょうか？ 彼女にとって、何が一番幸せなのか、あなたにはわかりますか？」

「……………」

「胸に手を当てて、ちょっと自分の旧悪についてなど、考えてみたらいかがです？ 自分が彼女の前に立てるだけの、清廉潔白な男かどうか。罪をおかしたことがあるとしても、それはまあ、人間誰も罪をおかすことはありますからね、人の価値というのは、その罪にどう決着付けるかで決まるものですよ」

観客は笑っている。

カードに書かれていた言葉を、エドウィンがほのめかし、その言葉に誘導しようとしていると思っているから。

だが、カスパーは表情を堅くし、何か化け物でも見るような目で、エドウィンをじっと凝視していた。

「女性が結婚に求めるのは、幸せで円満な愛のある幸せな家庭と相場が決まっているものです。あなたの彼女も、子供好きのように見えましたよ？ そんな幸せな家庭を目指す二人に、影を落とすような『罪』はよくないですよね」

「……………」

「どうです？ 彼女をちゃんと幸せにするために、あなたが気を付けなければならないことは何か、わかりましたか？」

「……………」

カスパーは答えない。答えられないと言った方が正しいのかもしれない。

今、カスパーが何を考えているのか、どういう状態にあるのか、サリーにはよくわかった。

逃げ回っている殺人犯では、エミリーに幸せなどあげられない。あげられるはずがない。

それどころではなく、自分と一緒にいる限り、エミリーは不幸になるばかりなのだと、ようやく気が付いた。

殺人事件からずっと、ある種の興奮状態だったカスパーが、現実から遊離したところにいたカスパーが、今ようやく現実に立ち返り、地に足を着けたのだ。

自分が出来なかったことを、今、目の前でエドウィンがやり遂げた。

そう感じた途端、サリーは大きな虚脱感を覚えた。そして、緊張感と焦りから開放されて、体から力が抜けていくのを感じていた。

(私.....)

とても泣きたい気分になった。

今日の自分、最近の自分、エドウィンと出会ってからの自分が、ひどく情けなく馬鹿な存在に思えた。

子供みたいで。都合が悪くなれば、逃げるだけで。勝手ばかり言って、エドウィンの言葉に耳を貸さずに。

(最低)

唇をかみ、サリーは俯いた。

そんなサリーを見つめていたエドウィンが、そばに駆け寄って抱きしめたいという表情をしていたことに、気がつくはずもなかった。

カスパーは、エドウィンの言葉に、みるみる真っ青になっていた。

観客も彼の様子に気が付いて、笑い声は小さくなっていく。

「おやおや。どうやら、彼には旧悪がありすぎる様子ですね」

と、エドウィンはカスパーが持っているカードを取ると、カスパーにそのカードの内容を見せた。

「どうです？ 当たってます？」

「なっ！ 俺は浮気なんてしないし、したこともない！」

カスパーは今度は真っ赤になり、大声で叫んだ。

その様子に、観客達に笑い声が戻る。

「あらら。外れちゃいましたか。時々、こういうこともあるんですよ～」

エドウィンがのんきにそんな事を言うので、ますます笑いは大きくなる。

「じゃ、こっちも間違いだったかな」

と、さきほどの『恋のリトマス試験紙』を取り上げた。

マジックテーブルに置きっぱなしにしてあった、先程、カスパーの手形が青くでた紙だ。

まだ湿っていて、薄く青い手形が残っていた紙をぱたぱたと振って水気を飛ばすと、青い手形はすぐに消えた。

「じゃ、やり直してみましよう」

カスパーが濡れタオルで手を湿らせると、再びその紙に手を置いた。

すると、今度は見事に、赤い手形が現れた。

エドウィンが促して、観客達が大きな拍手を始める。

その拍手をバックに、ロッシュがエミリーをエスコートして現れた。

いつの間に用意したのか、エミリーは薔薇のブーケを持ち、レースのベールを被っていた。

エドウィンが始めた即席の結婚式。

勿論、それはマジックで華やかに演出された。

観客達は若い二人に惜しめない拍手を送った。

エドウィンの車で、サリーはエミリーとカスパーを、殺人事件の所轄警察署に送った。

もう受付は終わっている時間だったが、当直の刑事に事情を話すと、すぐに担当の刑事を呼び出すので待つように言われた。

常夜灯だけの、薄暗い待合室に戻ると、少し離れたところに立っていたエドウィンが、にっこりと笑顔を見せてくれた。

とても笑顔をかえす気分にはなれず、サリーは長椅子に並んで腰掛けているエミリーとカスパーの前に戻る。

「今、担当の刑事が来るから、待っていて欲しいって」

カスパーは強張った表情のままで、小さく頷く。

そんな彼の手をぎゅっと握りしめたエミリーは、にっこりとサリーを見上げた。

「ありがとう、サリー。あなたがいてくれて、本当によかったわ」

お礼を言われて、サリーはひどく居心地悪い気分になった。

結局、エミリーの力にはなれなかった。

カスパーに自首する決心をさせたのは、エドウィンだ。

エドウィンがいなかったら、自分はカスパーを強引に逮捕させていたかもしれないのだから。

「お礼はやめて。それに、今回のことは、私が」

「サリー」

ぎゅっと肩をつかまれて、サリーは口を閉ざす。

肩越しに振り返ると、いつの間にか、エドウィンが側にいて、サリーをじっと見つめていた。

目が合うと、小さく首を横に振られた。

「エドウィン、ありがとう。あなたに会えて、本当によかった」

エミリーが、そんな二人の無言のやりとりには気が付かず、エドウィンにもお礼を言う。

「今日のことは、私達にとって、これからを乗り越える励みになると思います」

と、エミリーは薬指の細い指輪に触れる。

エドウィンがマジックのショーとしておこなった結婚式の最後で、指輪の交換に使った揃いの指輪。

マジックに付き合ってくださったお礼にと、高価なプラチナの指輪を贈られてエミリーは辞退したのだが、エドウィンがサリーの知り合いで、どうやら事情を知っているとわかると、涙ながらに受け取った品だ。

「どういたしまして。頑張ってください」

エドウィンがエミリーとカスパー、それぞれと握手を交わすと、奥から刑事がやって来た。サリーは事情聴取にも付き合うつもりだったのだが、エドウィンに無言で引き留められた。そして、エドウィンと一緒に、カスパーとエミリーを見送ることになった。

「……聞きたい事と言いたい事が、山のようにあるんだけど」

カスパーとエミリーの姿が見えなくなってから、サリーがそうつぶやいた。

「いいけど。場所を変えようか」

「エド」

「ちゃんと答えるって。コーヒーでも飲もう」

「エド！」

サリーの腕を引き、強引に警察署から出たエドウィンだったが、足を止めたサリーに仕方なく振り返る。

(そんな顔、してくれるなよ)

睨もうとしてして、失敗しているサリーの姿に、エドウィンは心の中でつぶやく。  
サリーの青い瞳は涙で少し潤み、それなのに睨んでいるものだから、ひどく痛々しい。  
華奢な体は小さく震え、それでなくても白い顔は、青ざめて夜の闇の中に浮き上がっている。

エドウィンは迷うことなく、サリーを腕の中に引き込んだ。  
だが、ぎゅっと抱きすくめようとして、サリーの抵抗にあった。

「いや！」

女性にしては強い力だったが、鍛えている男のエドウィンには簡単にねじ伏せることが出来る程度で。

エドウィンはサリーの抵抗を物ともせず、しっかりと腕の中に抱きしめた。

「どうして。どうして、こんなことっ」

がむしゃらにエドウィンの腕を押し分け、サリーは暴れる。  
エドウィンの胸を、拳で強くたたく。

「私っ、もうっ」

サリーの目から、ぼろっと涙がこぼれ落ちた。

エドウィンも驚いたが、サリー自身も驚いた様子だった。

暴れるのをぴたりとやめると、見開かれた目から涙が次から次へどこぼれ落ちてきた。

エドウィンはたまらない気持になって、サリーにしっかりと両腕を回し、胸の中に抱きしめる

。

ぎゅうっと抱き込まれたエドウィンの胸の中で、サリーは声を押し殺しながらも、本格的に泣き出していた。

しばらくしてサリーは泣きやんだが、今度はさっきとは一転して、静かに黙り込んでしまった

。

エドウィンはその様子に内心ひどく動揺しつつも、送っていくよと、サリーを車の助手席に乗せる。

しばらく、二人とも口をきかず、車内は静まりかえっていた。

サリーは何を考えているのか、じっと前を見たまま身動きさえしない。

そしてエドウィンは、そんなサリーの様子を気にしながらも、どう声をかければいいのかわからず、彼らしくもなく黙り込んでいた。

「お礼も言っていなかったわ。ごめんなさい。エミリーのことでは、本当にありがとう」

いつもの完璧なポーカーフェイスを向けられ、エドウィンはかなり落胆した。

再会してから、サリーはいつも表情豊かで、それは自分が彼女にとって特別な存在になれた証拠のように思えて、嬉しかったから。

それなのに今、サリーはまた、ぴしゃりと全てを閉ざしてしまったように見えた。

(失敗したかな)

落胆と動揺を、サリー同様にポーカーフェイスの下へと押し隠し、エドウィンも口を開く。

「協力できたのなら、よかったよ」

「どうしてあそこにいたのか、教えてくれる？」

頷き、エドウィンは説明を始める。

犯人が目撃されたと話していたこと。

エミリーの自宅に入ると、監禁されていたような形跡があったこと。

監禁されていた部屋に出入りしていたのは、恋人のカスパーだけだったこと。

エミリーに護衛をつけていたことを知って、サリーは何か言いたそうにしていたが、少し考えて、沈黙を守っていた。

「最初、エミリーは逃げだそうとしているのかと思ったんだ。だが、近所の喫茶店で君と会って、話をしていることがわかって、どうやら違うなと思ってさ」

しかも、部屋の中には、身分証明書などの貴重品がそのままになっていた。

そして、逃げるのなら、サリーに会うよりも警察に駆け込むのが自然だ。

「犯人を目撃しているのに、黙っていたことといい、これは犯人を守ろうとしているんだろうなと思った。それに、カスパーがエミリーの後を付けていることも、護衛から聞いていたし。カスパーが外国行きの航空券を手配したことも知ってね」

「大変。警察が見つかる前に、なんとかしないと」

自首する前に、高飛びする予定があったことがわかれば、裁判で不利になる。

「なんとかしておいた。逃げられるのは困るから」

再び、サリーが何か言いたげにエドウィンを横目で見ると、

きつと、どうして事件に関わるのだと言いたいのだろうか、その議論を今ここで蒸し返すつもりはないようだ。

「エミリーが自首することを希望しているなら、俺にその手助けが出来るかなと思ってさ」

「それで、マジックショーを？」

「そう。車にそれなりの道具が乗っててよかったよ。あと、すぐ近くに宝石店があったのがラッキー。結婚指輪、買えたし。花嫁のベールがどうしても手に入らなくて、宝石店のディスプレイに使ってたレースを、無理言って借りてきた」

「……とても即興のショーだとは思えなかったわ。どうもありがとう」

丁度、信号で車を止めたところだったので、エドウィンはサリーの頬に手を伸ばし、そっと指先でなでた。

「どういたしまして。でも、君にお礼を言われる理由はないと思う」

「いいえ。私はあの時、エミリーの意志を無視してでも、カスパーを逮捕しようと思っていたもの」

強張った表情で見上げてくるサリーの顎を少しまみ、エドウィンは優しく触れるだけのキスをした。

「あの時の君の立場なら、そうするのが最善だったと思うよ」

「でも」

「俺には時間があった。少しだったけど、君とエミリーが話している間、これからのことを考える余裕があった。ロッシュが手伝ってくれたし」

即席のアシスタントは、自首の付き添いは辞退して、そのまま帰宅している。

「余裕。そう、余裕よね」

つぶやいて、サリーは今も頬に触れているエドウィンの手をどかすと、前を向いてしまった。

「私には……なかったわね」

唇をゆがめ、苦笑をもらすサリーの横顔を、エドウィンはじっと見つめる。

(やっぱり、やりすぎだったな)

即席ショーの途中、泣きそうなサリーの顔を見つけた時から、エドウィンは自分の行いを反省しだしていた。

サリーを守ること、彼女のために事件に関与することは、サリーに何を言われても譲れない。だが、サリーだって事件解決に向けて頑張っていたというのに、その頑張りを見捨てるかのように、彼女の目の前で勝手に事件を終わらせてしまったのは、少々、やりすぎだった。

サリーを事件の外に追いやって、自分だけで解決してしまいたいというのは本音だけど、それをサリーがどう思うかなんて、わかりきっている。

それに、サリーは守られているだけで満足してくれるような女性ではないし、とても有能な女性だ。

こんなことをしたら、彼女のプライドを傷つけるなんて、わかりきっていたことだったのに。

それでも、頑張りすぎてしまったのは、一日も早く、サリーに認めて欲しかったから。

側にいること、一緒に事件に関わっても許されること、そして、彼女を守る存在だということ。

(頑張りすぎて、嫌われたら、本末転倒もいいとこだ)

「俺の部屋で、コーヒーでも飲んでいかない？」

「悪いけど、早く休みたいの」

決死の思いで口にした誘いも、呆気なく辞退されて。

エドウィンは、彼には珍しく、背中に黒雲を背負いながら、黙々と運転を続けた。

サリーのアパートの前に車を止めると、サリーは小さく礼を言って、そのまま車を降りようとした。

勿論、部屋にあがってコーヒーでもなんてお誘いが、あるはずもない。

エドウィンは、少し迷いつつも、サリーの手をつかんでいた。

「エド、休みたいの」

「わかってる。ごめん。でも、謝りたいんだ、今すぐ」

「謝る？」

サリーは眉を寄せ、いぶかしげにエドウィンを振り返ってくる。

彼女の青い瞳を、エドウィンは思いを込めて、じっと見つめる。

うじうじ迷っているのは、性に合わない。

それになにより、サリーの場合、明日も会えるかどうかなんてわからないのだ。

今夜、これからサリーがどこかに消えようと考えていても、全く不思議はないと、エドウィンは思っている。

「今回の事、俺は出過ぎた真似をしたと思っている。悪かった」

「エド？」

「最低でも、事前に君に相談すべきだった。反省してる。ごめん」

サリーは驚いた顔をしていた。

それは演技のようには見えなかった。

「私、そんな風には思っていないわ」

エドウィンの方へと体を向け、サリーはどう説明しようか、言葉をさがしているようだった。

「エミリーの望みどおりで、カスパーにも一番いい結末になって、私、本当にほっとしている。それに、私では出来なかったから。あなた以外の人に、ここまで短時間でカスパーの気持ちを変えることなんて出来なかったと思う。あなたは本当に魔法使いよ。とても感謝しているわ。出過ぎた真似だなんて、思っていない」

話しながら、何に思いついたのか、サリーはふと眉を寄せる。

「事件に積極的に関わってくるということで、出過ぎた真似だっていうのは.....それは、否定はできないけど」

「けど？」

「仕方ないわよね。あなたに会っておいて、事件には関わるなって言う私の方が、中途半端だっ

たのよ」

「中途半端？」

サリーは小首を傾げ、口元に疲れたような笑みをうかべた。

「あなたにこれからも会うか、それとももう会わないか。私はどちらかを選ばなければならないのよ」

全てを受け入れるか、それとも完全に拒絶するか。

サリーがそんな事を考えていたなんて、今まで思いもしなくて、エドウィンはぞっとした。

「い、今すぐに決めることはないじゃないか！ 俺は時間がほしいと言ったし、信頼関係はゆっくりつくっていくものだろ。これからは、俺も事件にどう関わるか、もっとよく考えるよ。君の望むとおりにするし」

「……」

「サリー。まさか」

もう、会わないつもりじゃと、言いかけて、エドウィンは口を閉ざした。

そう言って、頷かれてしまった時には、自分がどういう行動に出るのかわからない。

それでも、急に態度を硬化させているサリーからは、どう考えても、これからも会うという選択肢を選ぼうとしているようには見えない。

ようやく、自分に向かって開かれ始めていたサリーの心が、目の前で音を立てて閉ざされたような気がして、エドウィンは恐ろしかった。

気が付けば、サリーの両肩をつかみ、抱き寄せながら、唇を重ねていた。

抵抗はほんの少しだけ。すぐに、サリーは従順にエドウィンの唇と舌を受け入れてくれる。

抱きしめれば、キスをすれば、サリーに受け入れられている自分を実感できて、エドウィンは少し自信を持てる。

もしかしたら、愛されているのかもしれないとさえ、思えた。

だからこそ、サリーは自分を凶運に巻き込みたくなくて、逃げ回っているのではないかと思っていたのに。

(もう会わないって、どうして)

事件に関わっても大丈夫、頼りになるんだぞというところを見せたかったのに。

それなのに、どうしても会わないという結論になるのか。

そこまできっぱり拒絶されてしまったら、これからどうすればいいのか。

唇をはなしても、サリーは胸の中にくったりと寄りかかってくることはなく、そっとエドウィンの胸を押して、体をはなしてしまった。

頬は薔薇色に染まっていたけれど、サリーはエドウィンの視線から逃げるように、顔を背けていた。

「サリー」

そんな拒絶を見ていたくなくて、エドウィンはまたサリーへと腕をのばす。

「待って」

だが、サリーのしっかりとした声での拒絶に、触れることは出来なくなった。

「待って、エド。お願い。時間を頂戴」

「時間？」

「お願いだから。一人にして。ちゃんと、結論だすから」

そこまで言われて、エドウィンも手を出せなかった。

迷って戸惑ったすきに、サリーは車を降りて、アパートへと走り出してしまっていた。

すぐに追いかけてみようとしたが、一人にしてという言葉と、エドウィンを拒絶している後ろ姿に、エドウィンは深く息をついた。

「.....時間やったら、消えていなくなるくせに」

つぶやいて、でもどうしようも出来なくて、手出しできなくて。

エドウィンは目を閉ざし、ずりずりとシートに深く身を沈めた。

翌日。

エドウィンは、昼前に、サリーの働いている旅行代理店に行ってみた。

店は臨時休業の張り紙をして、閉まっていた。

タイミングよく、裏口から出てきた関係者らしき女性を捕まえて話を聞いてみると、営業の一人と事務員が二人も急に辞職し、店を営業することが出来ないということだった。

どうやら、カスパーが殺人犯人だということがわかり、その対応にも追われている様子だった。

(やっぱり、辞めてたか)

がっくりと肩を落としながら、エドウィンはサリーのアパートにも行ってみた。

すると、驚いたことに、サリーはまだアパートを引き払っていなかった。

前回の発砲事件の時は、もぬけの空だったというのにだ。

しばし迷ったが、誘惑には抗しきれず、エドウィンはサリーの部屋の鍵をあけて、中に入ってしまった。

サリーの部屋に入るのは、これが初めてだ。

だが、サリーの許可もなく、部屋の中を見てまわる気にはなれず、玄関扉に背をあてたまま、遠慮がちに部屋の中を見回す。

きちんと片づいているが、生活感のある部屋。

日当たりのいい出窓に置いてある鉢植えの花と、家族写真が入っているらしいフォトスタンド以外には、余計なものは一切ない。

なんだかサリーらしいなど、エドウィンは小さく微笑んでいた。

「引き払っていないということは、ここに帰ってくるってことだよな。一人で考えたいって言うていたし。結論ができれば、帰ってくるってことだよな」

完全に姿を消してしまった前回とは違う。

サリーの言っていた時間がどれほどのものかはわからないが、その時間を待っていたら、サリーはまた姿を見せてくれる。

「そう思ってもいいよな」

それぐらいは、サリーの中で自分の存在が大きいと思いたい。

でないと、とってもじゃないが、悲しすぎて、情けなくて、立ち直れないかもしれない。

エドウィンは、頭をかかえてしゃがみ込み、しばし深く落ち込んでいた。

だが、すっと立ち上がると、ぐぐっと拳を固め、気合い入れた顔でサリーを部屋を出ていく

。

勿論、このまま指をくわえてサリーが帰ってくるのを待つつもりなど、エドウィンにはない。

まずは、この部屋にサリーが帰ってきたらすぐにわかるように、センサー設置してやるって、エドウィンは走り出した。